9/335
T45

資料文庫

初院
△ていかんより御門いまだ
弘徽殿乃かへ(仲隆)
わのまへおもひもうけ
こわりとけまさ御門の御
さそはひなれ
同
男もすなるまことわりを
やまとなんわをけるに
(初院)
春宮院五十九代三十二世守多天皇也 御諱定省光孝帝
三御子ニ而皇太后班子女王仲野親王(母ノ親)女元慶ノ孫(仁明ノ御子ニ而時ノ)
(現賀茂明神ニ請院時ノ祭リ給時未タ王侍従中将ニ)
而賜源姓 仁和三年立皇太子即チ

受禅(ゆずる)　昭宣公
同冬即位　基経公関白　陽成院御時摂政　此時関白　此君治天下
十年　寛平九年丁巳(ひのとみ)　分一太子　敦仁御子　延喜帝也　時十四歳
譲位(ゆずり)　朱雀院　朱雀以西二町三条以南四町累世法院也　尊号
太上天皇　昌泰二年己未十月十四日於仁和寺　御出家
仁和寺　弘法大師(真言祖)　御作三法号　金剛覚ノ　御師益信僧都　四代伝ル
傍太上天皇号十五年幸亭子院　亭子院ト　西条一条南二町木辻東二町元刑部卿(源湛)故宇多院ノ在位以年号寛平法皇云申也
後幸宇多院　七条坊門小西洞院西二町元七条后亭心故申
寛平元年七月十九日崩御六十五歳
おとゝかなひなんとそおぼしまし　寛平九年　弘徽殿ヲ昭陽舎
女七条后温子(おんし)　仁明ノ女　仁勝ノ大ムスメ　純蔭女

ハなちたまへるも　古今一歌ヤ此時ノ
山川乃とをくへたてゝ　ともいふ
分むつましのほど　行ゝてもなほうみ路と伊勢の
海のほどをわすれ草　初段ノ歌ニ
おもひやるかな　秋ぎくの　ちりまがひたる
をりにこそ　かへりこめ　ここに

乃せにて生ちいるみす
り神けるとき安と
給ふれをやそれいる
人あもちる里を向いて
まこれるんをそまでまる
よきー給ふいとわりき事なとして内より
中ねこれかまちへそ
をひけりまりき給いりを乃ちいまと給
てひ〇と云ふりおりまます事をおりていとれ
うもりにくおりまます事をおりていとれ

しかり給ひにくひれとも
路とそふれをこれよし
故郷乃をひれ乃美に分
とありけるれ処なきそえよ
名を寛蓮大徳といひく
なとお給て又ねてーい
日なる秋不富以くし山
御幸延喜十年十月二日熊野
なり吉野滝御幸を来御お家昌泰元年十月
廿一日なる大井川に幸ハ延喜四年四月十九日

備前様御吉後ハ清安孫吉清子女将中将殿
御中将誰と申御
ふる江乃宮　無心所
寛蓮大徳　吉後也心明心日根源記也
蕭家創天下名山置大徳七人云々異朝僧宝伝
日本記ハ大徳ト云ヘリ
故源大納言宰相ハおりけり時系図ニもを以
亭子院乃御賀ハ給ハりてかゝる事ハ
なんとなく書けるよひとゝ
多くへとまし給ひしかれハ初けこをわすれ給ハ
給ふくうこにいろ〳〵深き契ハ給ハりきゝ
ゝをもとゝもよりもなく
これ乃宮くせ給ひしかれハ九月
けこゝろまいそきそ〳〵ゝわたくし共十月ハ
弁ゝち乃日これもいそき給ける人ゝのもとにを
ゝちもける
ゝおいてゝ秋いろ〳〵なるにをその通
そのいろ〳〵給ふ御ときハ御もなくこれをもかれ
ゝをもいれの川給ふ事ゝやなく
わ乃ゝせ〳〵そこもいて志乃ハてこをもり

なとにけま[illegible]ゑそ[illegible]こ
[illegible]ろうけれやのまつ白浪乃さくく紀なひいつるさい
こなをいつをけるを其辺一をもせくうこへなわ
ほくさほうさうわるをおやくく
ありきうんけ風まあるとなるを
萩乃はどうもまて宗なる吉日志もまて当いてなれ
そなをやを給へをけまいとくくて暁まあ
なん魂をなり
故源大納言ハ 法陽成院源氏時叡慮也
宗操卿基前 左金吾時平公女雅明親王母
融公の息 法院の大納言源昇公孫 基前行路父宗操卿を追悼する詞書あり

亭子院の賀 法皇六十御賀也 拾遺集に延喜四
年九月六日法皇六十賀京極の息前大納言
まもりける屏風の哥藤花をよめる
松風乃如をはらひ打ふくもあらなくもあちなき
ほけ物一枝二枝 今朝の打枝なとはけまくけを
宰相法蔭ま御息前大納言
ひけこそ 松為るや折樓なる
ぐこ 敏まこ父不見夜京千葉妻也
いろくにそめさせい いと芸也
志さりのくをもまれ 式掌乃織物也

[illegible]　かさねの糸深き紅
九月晦日[illegible]れいそさいそ〳〵　廿八日御賀正日九月
[illegible]心日、後宴心
[illegible]この文此可　うつこの野山といそきの糸深く秋の久〳〵深ゆく
[illegible]時雨[illegible]なふと深まりと時刻の移り行さ
[illegible]をよみ
[illegible]これもつまこよるとも[illegible]いふ　むしまく清蔭のめ
[illegible]とこ
志いその[illegible]ことも　事のいろきにあり　御賀
[illegible]

思ひいてらんなり
[illegible]かけの[illegible]あやめ[illegible]
さくれるをみて[illegible]此可　打ち白波と
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おもふ事を打ち歎き我を忘れ
ぬるなど云ふ事共深きうらみをこそ乃ん
いとにくし　二となくそてこそ
（菅三位）
野大貳すこしかさそきうて乃使ニ乃ら飛
ぬ仁てくるゝけるたゞ
仁ともなる〳〵歳毎ニわるゝけれ
るゆゑの幸いやにもはつまれ
ゆうたゝけれ京ま
くる人もおさ〳〵きこうてわる人ゝ仁信ニ
きうわるゝもふわる人いさ
幸いそきうんとなふかと京のあまもわるり

迫記云志乃君ゝ文をなんもてきくるいふ
うてわけくるれ
いて月日うおてうまて
（拂）
もくるけゝるおわゝめ君ゝ为をわけうやゝたんと云ゝ
ゝれをみくゝうとなくるけるゝ仁信
なうぬゝ　ぬゝこの
うんわけ
（加）
野大貳ゝ參議小野ぬ右ゝ（ろ）天慶ニ年正月（ゝうゝ）捕
使（ゝ）迫賊使正五位下サ将ゝ元浚大宰大貳ゝ
サ将ゝ元浚大宰大貳ゝ

すこく　伊豫守藤原純友之平將門ほくー丸をこうし
ほくー丸　服月乃うるわ　正月五日叙位正下一加階
ぬ右ハ天慶三年正月正五位下左近衛少将兼
一日叙従四位下くらいこれいこと年乃正月ろゆう
芝くくろ
おさくく　頌心
云忠九君　大蔵卿正四位下源朝臣悉光孝帝孫延喜十一年
三月昇殿十八年正月掃部助三月蔵人九
一年従四位延長二年正月五位三年十月内蔵

権助六年正月左の弁宰二兼平三年権右中弁
従右大弁源云忠こ附ふ通ひる
むくけの守　あをなくやぬ右正五位下也
浅き跳を易やい甚まにく深紙を忘ある
しとおりし
前坊乃君ろ也ぬ
ゆくのこ　大輔ろ也ぬ
給ふ口ふなわに　ゆりきさい乃云后ふ毎ち
ゆり乃れいよこそ　ふくく迎ーふ
侍従宰相ろ也ぬ　風なり乃

前坊ハ　延喜帝第一ノ子保明親王ノ延長元年三
月廿一日薨ス一説来春ト
人物ハ　前坊乃乳母ノ但馬守源弼女ノ古今ノ
作者
きさいの宮后ノ穏子ノ立給ヒ　前坊ノ母后穏子ノ中
宮給ヒ穏子ハ昭宣公女七条后温子ノ妹ノ延喜
帝ノ母后ノ内含ノ故公女弱子ノ穏子ト申ス
殆ハ延長元年六月廿六日ノ前坊ノ薨給ヒ次ノ
月ナリ
琴ヲヒキテ　前坊乃ヲセヨトヒキ乳母ノ立給ヒ

人傳ノナケキ心ヲ
伝ヘヨ君ノ琴ノ音
リトヒキヒヘシモヤ
哀雅院　待賢門院ノ
ヨミ給ヘルヲミテ
校本ニ敬ノ花ノ乱ヲ
ニヨリテ　古今集ニ不レ追ト
延長八年乃至ノ
延長元年乃至ノ
ル慶頼王ノ宮ノ
六月十八日薨ス
今ノ琴ノ音ヲ
今ヒキヒヘシ事モ
ノ白川ノ乱ニ
ヨミ給ヒシ
ノ花ヲミテ
ヨミ給ヒシ
ノ花ノ乱ヲ
ニヨリテ
ヒキヒヘ

仁太子来萑院や中宮穏子や文房太子来萑
村上乃母后也
弐番後
○あさゆき中将人乃女にくわりうの人志のひて
あひそうわけるを女ともおほひつりて住るかとみ
みたとこ人のほめりみりなわてくるとけまこに
まもれもいとわりなくよふ花
たのりつれ
多くやれわのなまーるをいかにそ宮こ完ひてまる尾
こなんくりけるにいれやをけ
朝忠ハ　三条右大臣定方乃男　天慶六年正月

廿日右近中将六年十二月参議後中納言左馬督
人乃ちにてあまけるに人誰をな
女ものひりて　朝忠となりふ
人乃母ともいまのおもれたる
これもかれも　朝忠乃ともなり
さくへやまの市　朝忠乃市也　人1
なくて我をやるを我1おもひそと
らなくいかー多をめくりてそうみ
弐番
○男女あれおりてうらをいきうな海を

さまりてそれまでうち久れとわくともなくて
やをらうつふしやわらかなる人男も袁となひうく
なんいひそわけるる
あの事いかがきうとうと濃たる袖まてあり袁
女いとおほしたるとおほひうく
男女　それそうし前の心あきてうう松遺集1
平忠依
中宮
監物　あの事いかんまわてはとあともさやちさしわれそれ
監物答ぬのもとう中務　えおりすしかうしけく
と方乃みさうまそこうひいえうんまうてぬとも

あまとけまいうれ返事り
あの事ねてさいそれをそぬさかう比記と書うとも老とも
ひあるとうれい方ぬさうわそとひまとおりましてん
おほとれこのまとりけるかくて又久しくをそし
給いさわうふしさうみ院しかまとてな老久
多せうそこなとも物せさうけるいよおほつう
おあひけんなれそ返事
おかさいけのこりき救ぬとうう老さ許さ
返事いうれりやそわうう人人老まうう
監物答ぬ　友朱千前女答ぬい中納の君女なと

中神 延喜帝第十六乃御子 第明親王 号前中
書王 母友永落根女
かくれもなうれそ 中神の方 寅方を若十二支にけて
小十二月を東より左へめぐりて取るとき
一月 巳酉の日より天一神乃天一神の方 寅方を若十二支にけて
東へうつる寅方を若十六日天一神あり
四月 戌申の日 十六日天一神乃事 寅方若十二日
七神 ともに 天一神乃事 寅方若一日
いへともすこしくるる日のくるる
ほとなく一日のうちの事なり

中神 長神 女院 一説に云

行事をいむ
あの事 かくなされそその前
まことあるさうしなまとも君のおとゝ我ちりに
うつり給ふるうつしなまとも
中神 まことへていふ時は前にこうしにさうとおいぬや
ひまとてかりまうしうかゞふ
焼滅乃院 大学寺に焼滅天皇 雑記
おはさゝれ池のそうさゝれ事 れせうこいふ角とも
我男さうふれなんとうみなんとてつき
而白くやさしきあとに

桃薗
まいるふよう
おほろ秋のそらも
かきくもなくおもしろくて
いとどくれを
わるそそそ

わうとふ事ハいさけ
けまハよこと多りくるか
ゐなゝ河とみなもわるぶ
監令如　前ニあり
なくこハ　京極つゝみ
わるこハ　ゝの栗田乃宮
ある宮をゝ斗　ゐをう
おとり　このちおもわらぬ
こゝろうをとりしくけ
故源大納言
道家公のゝしい栗田別荘トノ花御所栗林ノ御栗ニハ今如ゝ行ニヤ

こゝろなりてすゝわるを
文りはきをてゐり
なとわりけまハ
結ひくるちくよう
但乃ゝ松るらなく
こわりけまを返一
不くいおりとゝ
こゝんをける
故源大納言　清蔭卿
おとうとゝ信濃権　典前男

亭を院乃
ゐくやのしくる
君を称よなわくる
信の字やぬくしかいくるを
右京大夫友京忠房

なを

なを　わすれ　わすれとふんこ尸なにもわり(延孫)
すまわるをけるい　かよ(ん)ん伯こ亭西院乃日り文そ
北亭子院女延喜皇女こ前斉院詔子こ延喜廿一年
退賀茂坂大納言清蔭こ宝こ
そたなとわりけまい　忠房の女九東の方に住
蔭乃みたるとこ)
そともあしそい　殊あ数こ
伯の江乃言　清蔭江の言こ
古その言1

久しくもあるへき伯の江の松ならねさのみそみまき
こりふかのあんをとりかへくもちゐりなまと称ぬ要人
しきといふ」

返し　久しくいふ乃言　久しくといおりん結りあれはとも
松やわれかりるとうれもなや言九松いふ乃一
そとふんこ

ぬれ袖
ぬるかとみ文をそ袋ふくみとれわせ
なまと結ひるろかへりて
わるとい志川なき声ぬ歌のまとや思をろ九いみん

わの玄斎院おほし給て、配流薩州に給とも、
そのゝち　元給ぬるまゝ参内しくかゝる折柄へ
わくといへその奇　怪なる不思議のよしを奏聞
なるゝもの来のよしにてよこのんいなき次の
らぬよし心底のうらひそてよこのんいなき次の
事あるハ勿論なき旨もわさ記わせ一事を
沼津
十万石
もて申せ一度乃ちぬとふ人のかゝいふ一ことゝ
人なんありけるそわもいてきく位々
ありとてもかゝるかたにはまをかまうくれ
なひわりくゝもとふ人なれ共ハ一条ゝ、
君とゝいふ人ハ一ことをいとうく志ま也ける人
ありけりかゝるかたにはまをかまうくれ
あやしとありひわりけるを狂おとゝぬ人のすきの女
思ひやりけるを
こきこしよといひれ
なき人を君きこふ
藤原千葉ハ　忠信房名一男右馬允政服仕寺也
致なくけのあやのまゝとゝみ一人なわ

一条の君　坊城殿の伊勢の守のもとに若き人々
やどりて
遊びなどをしけるを
こゝに人々又不具天暦女房人
すさ　従者し一条の君のすさし
なんどやの事
遊びなき人々の事
ちゝそゝめき
仏なき人を君ゝきこえ
き人乃事を

我うけきそへ給ひんほとみそうひいりそく
くちおしかりし事をなうらみそとことわりうし君の
きこえ給ひし事を（なんとも）
この人のきこえしに
中納言のきこえ給ひ
かゝりていい
みまことをいれそをよう
けそいれそこかまことそ
ありそくまかまいりそ

十二條 小句切
○本院乃方ハ

淺き淀子位おとなる
日のさまこ　淀子
かをなるぬの
方々も舟りみてなる
るけると仏解一
みとはくるなおさ
やなるけまいて
けて変乃御子
乃るいは武さ一つ
陽成院乃子
まるいかくるとおり
ゆへ一
ちみかねみるた

そ御子野へそるけるる
将逝一
春秋乃方
陽成院の子
まく文七将を
春秋乃方
小野乃る色の名
逝一春七秋りは
故式部文七羽乃
なけまそそるる
春秋乃方

典侍平る
小野誠風こ寛平二年任若
春秋乃方
小野乃る色の名
逝一春七秋りは
なけまそそるる
故式部文七羽乃

故式部卿

故式部卿の詠

秋風のふくにつけても人の待つ我に似てうき初雁

返し

我を恋ふる雁とし聞けば秋風に初雁がねも悲しかりけり

故式部卿の文　光孝帝の一皇子忠親王也

朝子　楊吉後女子うつほ乃女房

小野宮風かよりし心故に結風をまき文なれどもかひなし

秋風の

人の心のかはりやすきをなげきたるなるべし

あわけき民我を秋のせまるなるべしとなげくやうなるも

事なれどもみな人の心の成べし

返し　我の我をおもふにあらずとも秋風吹かば思ひ給へ

かし　返事

故式部卿二位乃ふみを

五九

十月乃七日乃文に菜を給ひたるに

故式部卿とあるは寛平中納言敦慶親王なり

実は故式部卿とあるは

人の引れて文故部卿とあるに同一人なり

二位御息所　昭宣公女穏子　延喜九御息所
宮様々々妹也

おもろの乃命　人明こ
おもろ様並
おもろ人同一みこ乃命
是秋乃事ありけり
世にあまてらしくせぬ男ありけり
こわりけまそ也
多賀に越ける時に神世月朔日に
となんわりくるんまいてきくるんまうと給々ゑ
同一人　二位乃御息所

おなりみこ　敦慶親王こうや也不久くおりまさ
をとなる
世に無まそ也
きとふんをいれ
多くれの命
ゑ神無月まわるを
過て神無月とわるを
そんそこと紀の秋の事
ん〻いうて　紀名の
故式の文を徳ゑ

…ましまして久保田の…
…給へりし…
久保田宮なる月の…
となんありける
故式部卿敦慶親王や
桂乃みこ　寛平皇女孚子内親王と敦慶異母
妹と後撰集にもありよりてかくはいへるなるべし
わかれてのみこまりけるのみこ
慶安寺にて…
こまりうりみこまわ…

うたにみてなわ
久うさめ　孚子内親王の…
らいめてを君をうらんものをや
良少将なりける監の令ぬ…
女のりとも
拘…
迎…
拘…
となむいへる
良少将ハ　良岑義方…

年蔵人八年中将氏慶元年卒

監乃氏女　前ニあり一人ニ

かゝハ其外　元女乃ちゝけをも物まといへゝなり

杜の下草おひぬたのもひそいんありとも我ゝん

つゝともれとおひぬる老をも老ぬまて

かり寝ふるとも

返し　老ぬまてのかゝ

かゝ所ありといわゝこい　そゝをいふらゝまゝと

女の守を文ていへ

お忘うるな　良サ君ゝちの松ゝをつまこいを求かけまこい監令

女なんゝとうりとゝありとといひくゝ久ゝくゝゝゝ

けまゝ

あゝ人ゝ女のうゝゝとーその川のあゝ女っさをみそやみ

こいへけまこい監令女ゝそ久列ゝてりとゝそやゝ

久列

冬乃ゝ松ゝをまこいまこいい

め草加へ

あゝ人乃守

深川をわゝん人のいそゝいあゝるゝそふまんゝん

乃と葉をとりてみゝくやまんゝと

陽成院乃二ノ皇子 貞保親王
延喜十年右の将

うその恋いみちやま山
道一女立よりみこ
みちのくふこもるなかきう時ろぬる
こもり給人こ
と詞 ゆうこのなとそれわくは入戸をこゝてあれなれ
せのなくしの前 せきとめる人をなきにそて給
と涙く恨こそ侍
先帝 それらきこに右大臣安此女御うへの局
より給てさまひし給りおりまゝやをれと
ちくまち給ひりまゝおりまゝりくれを

日くらす君まち山のくもくまてこゝ時雨
こうんきこてくり
先帝 延喜帝也せんないとも申るみうて
を光帝とあるは誤也 六十八代也三世延喜帝、
宇多帝一御子也母贈皇太后藤子内大臣高
友公女これ諱敦仁十七才にて御即位 上皇(すめらきの)
初をうけく大納言右大将
藤家(フサ)補佐(スケ)一万機(ヨロツノマツリコト)を内覧(ウチミ)一給ふ治天下三十三
年享(ウケ)年(トシ)宝(タカラ)算(ヒサシ)尊号(ミナ)醍醐天皇
右大臣安此女御 三条右大臣定方公此女善子

[illegible]の西定のうしろの三間
日くらし井九寺
古今にもいでゆき
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かれむろ　　ここ屋ぬりけるかたなり
芝の人丸の御影
（古今一云）
様　みこいとみそうにあるまき人ひとまろ
くりたにこれりとにみくをこそおもへけれ
そのまをそらにおりふまことて我名とみまことれひえの
こうんありける
様　みこのかた　様乃字六書之様の字ハ西河の字
なり　俗ハ久ゐ
（古今一云）
いへる説
あふまて戔人　誰古今集ハ此歌ハ人丸の
あるとそやくかりをる人成へし
それをそれの御門　古今集ハ此歌ハ人丸の
此御門　様　みこの御門とふ説なれとハ
しかるへからす　此御門ハ文徳天皇
こと御門のミこをさつけまつりや文徳天皇み
人ハ人丸のまことに御世あく我をとみて人
ともおもふそれをそしりふ事とせんとなり
人のきこうす　そちおりふんし
（古今一云）
かいせ　とふ人ハ外ならて山ハをむろあら

まらうこ　貫之友則なとゝもあり
一説ニ友則ハ有常ノ名虎ノ子トいへり
且ツ友則ハ敏行ノ母乃姪ニ一統友則ハ有友ノ子ニ有友ハ名虎ノ姪ニ蔵人本道（モトミチ）ノ子ニ敏行ノ母ノ
いやいとこなるニ敏行ハ文則ノ伯父ニ文則ハ紀納言ハ若元天皇乃（ワカモトノスメラミコト）九世ノ孫ニ大忠信（オホイナルマコトノ）命（ミコト）ト
とあり紀納言ハ若元天皇乃九世ノ孫ニ大忠信命ト云ヒ
代々孫中納言梶尾ニ至リ敏行ノ母ハ梶尾ノ
敏行ト一類ニ
貫之ハ蔵人本道ノ孫ニ望行ノ子ニ敏行ノ母ハいやいとこなるニ友則ヲ有常ノ子トいへり貫之と
ハ従五位上玄蕃寺
貫之
時文
女子
宗庭
行廣
勝延（カツノブ）
兼均（カネヒラ）
古今作者
有常
静子
権子
女子
友則
古今作者
名虎
中納言梶尾
奥道
本道
望行
有友
友則
女子

わすれもてゆくり　戒勝の母業平乃妹や

あさきわれ哉　文則の言ふくにみるうこくき

つとくらきこころにおりひめくらし　せりまおりふうろ

わろぬ事を求そうるに　おもふ事を文てけみもみるうこ

ことのうたえ哉　おもふ事をえ　おりひなく

うくよていまそ○　さむへ一時ともあまこるけさくる言の

海らうとい　とい○つるもの泊ゝ

十三段　故式部卿　文丹三条右れおとゝ　上通部　なを

ふいしてといり給ふ　参うもれあそひをとゝ

給てよみけまこ尽こと

それ事ねなをそ○ふ女郎花をうち折ふて去れ

おとゝ

女良花おにおる名のうら

こなんありけるとゝ人こ

まにゝわ

故式部卿の家ハ　光孝帝是忠親王也号南院延

喜廿一年九月薨一給ふ南院ハ宮城也

西なり

ぶ生部　三位ハ之れ乙卿也

泊いて　うとかる
かれけりのると　　追善乃俤の板地こ
たれおと〳〵定方ふ心
もゝ〳〵の
ゆと尺もゝとといふことをそへもりまる
けのごくわゝをけみを御ぶと自問自答
もゝゝ
と人〳〵れ多れと
と慶数乃事法や
故右京れ〳〵宗千れ君なりいけきほとに我

記着け奇妻傷れんふりき

ふれえなりいてぬ事をおふ給ひなるは
亭ふれ門〳〵紀伊國より石つきそるみる
なりいるを見にく人〳〵奇よこゝなる右京れ
おゝ乃風ふけ井れ浦〳〵ふ川波の名おゝや室ふ頭ん
右京室宗千ハ　是恵親王男之大夫(ひろうつミれんおう)をつゝと云なり
寛平六年四月従四位下也亭ふみみとにハ姪也
なりいけへきほと井　ふ乃せぬをなけくゝ
沖津風れ奇
ふけ井の浦紀伊室名ふ心ゝ
も浅位の迷惑と

白ーとて山里ハ冬こそさまりけれ

（お院のうた）
○おもふうきめをみれど人心

（ふかのうた）
○ふるさとハうきめをみれど監物命婦

ふるさとのうきめをみれどもみてぬ姿そ乳母なる

よそのうきの事　おなじ命婦

もかなわかみひとつのうきさはひなりけるを

うきことなき朝のうけさはひなりぬと

そうきもまもろわかいほりせんよ同ー

（大納言）
○亭子のみかど　大納言のみやすところ

又

（大納言）
○雨ふれる山里なれハやすらひて紀ぬる人やあとまさるらん

（大納言）
○ふりすてゝ今ハ行ともかれ草のこれハ人なりけりと

君なくてあれたる宿ハ松虫の声のかぎりそ音なかれける

ふりすてゝいかにせよとて（大納言）ふるさとの人をまつむしなくなるん

（京極御息所）
○京極　男なき事をなけき養ーなるかなと

ちきる浅緑を迷ふ露ハ消ぬ

あのれふの事

案ずるに、ゆゑ有て我が君の
このりをわが身にとふるにたれあるまじなど
ぞとうらみなげくうち人もわろくいわるゝ人の
数ならぬこそかひ（甲斐）なけれ（ども）
おそれながらわが君ばかりぞいま陰あさくなりぬる時
の御なげき　かゝりぬるわざなりとこゝろ慰め
のたまふめれど（此人の詞ども心に滅のこゝろあるま
ですきぬんと恨みなげくこゝろにぞ有ける）
御姪なる（ども）をこゝろ底人にはかりこゝろ

二首めんを記おもひ泊ゝ

僧都の君　敦實親王の御子にて後寛朝僧正真
言宗廣沢流の元祖ゝ僧都の准ぢ位ゝ
かひなくうんぬんゝ
（水戸藩）
朗恒の院ゝこゝろみゝくなげけれ
ども朗恒（の）ことゝもゝこゝろにこの男はこゝろに秋を好き
ぬ（と）ぞ
延喜七正月十二日（の）ことゝ知有ゝ
任卅波介大同二任滝浪、
従四位下
院　宇多院ゝ

立ちよりぬれば奇
ふしぎにおもひて
出方なき方をうち
案じ
右京乃ことばに女
宗千ども女ばらも
奇異がる
右京にて誰かの足音
こいへをんなきぬ
ぬぎ給へ
ぬぎ給へ
ぬぎ給へ



内ハ名使
大内山
延喜帝ヨリ法皇ヘノ御使ノ
衣笠山ヽ新古やとも引ク衣笠内大
臣ノ事ヲ

ふるなるやこれぬ
ひ山乃ふもとに宇多法皇ヲ
院乃宮門ヲ引ハそけて乃ちより伊勢物語ヲ
おもて
みむろのまつ
いと物ノ如くてヲ
白雲ハ奇
禁裏ヲ大内トいへ白雲ハ九重に
立ル
一首ハ遠ク大山ヨリハ
即時ノ感情ヽ
伊勢ハ名ヲ
九九作
ヨリお妓宮ハ

此中納言勅使にてくるゝを待ふく
　呉竹は世々ふるやどにあれどなほ
　此道一ハきりをは没前文ありますをけの玄
こうんいひろく
前斎宮　寛平皇女芳子延喜円母
勅使にてくるり絵かゝせ　長奉送使まいわう
を芳子修理ふ此前延喜帝より奉幣使が
とに兼輔くるうなるいそひ前文海
　呉竹の前　やもとうなるいそひ前文海
　おりますをを
記名此泊ゝ此時より竹此文

ピアすとこ
三位
ぱつをうくるひとうい殿上にて我いえせさやまを
はゞけるよみそうを
かくける花もてそある我ゐたれ言やふへうくる
お雲寺　相(ミテユキ)ともこ相みに向前文牧信うるこ或院此前
春道此別樹の前のとくに　別樹ト相如　是兄中也
くるから
ふゝんこと事侍ゝ
三位
ろう文言逸ゝ
先帝此文乃みこれみむをあは一条乃君といふく

京極の御息所みやすどころにかよひ給ひしほどに、
ぬ事ありて後そのちに絶たえ給ふ。くゆきこゝろのやみにて
いかゞとぞ。

多武峯とうのみねかくろへ給ひて

先帝　是いと宇多天皇ご

みのみこ　二ぢ兵部卿敦固親王ぜ

京極御息所　在お

ひとく　ゝ故ちゝ左遷（ふるさとびと）ゝ給ふ也

ゝ我をいとふ人をにおくるふる

ゝを後さらに乃ち

人おもひいるけきをゝ恨うらみて再返事を

うるよりもこゝろよりけるいかゞ

くた流人乃ちゝかゝれども

伊勢ぢ二ぢ

君ゝおもはゞそこりきこえ

ゝを尺右京ぢのことよ

ゝよみゝくをゝ

ゝ義孝ぎかうぢ

伊勢ぢのみち

ゝおもひおこせ

ゝ忠親王男　兼平ぢ

中納言敦忠ぢ

源正明ぢ

ゝ

ゝ

ゝ

左中将天暦五年冬参議大
弼(隆国カ又ハ)
うこのりくるうる(こ女の出生)
右京の　宗于心明乃卿
をく嘉の前　嘉禄元年のわさなるい中くみとそ
(乳母カ女房しや)
わらんとそくるれき事を初めて嘉に参へよう
女のかを添そること
(ホニ作)
桂のみこ武部に
ひくるうるなんけれとこ文をいとやくし
こおりひけるをも文り給いかはとり
雲のうれりき言をうるへてとこれ
にれ給ひ乳をかさみれ神ニ尚をうるへて
ほそても覚せすそ
ほそうるれ
皇子内親王のふこ部
うるひ　くうれみこのこおりけるほ
教慶のみこ教慶
童れ懸想をかりけるとこ
(ホニ作)
かくさみ　汗衫こと
ほくめるの前　ことふつきふとそな
ひこ火をるせうる

今とうきにつら乃みこの
まいりたりけるみの神
イにハくかるる此ふし
源大納言
○飛鳥
ゆ君此みやとにう
まいりけるそこにて
万乃事をはれ
つまくなる日
ありけるあやしう
仰てうちもたり
よふことふ人
ありけるを
源大納言
○
そこにて
日を
ふくいとんたくさ人こうれ
てまろ川乃あ
なん乃あれるいひ
いひはせそな
こと結ふれたまも
まくとるんうまこけるあ
こそいわまけま
陽成院此みこ
干兼の書こ
て

おもてをふく　大納言なども
もとあわてまどふ　あやつこと（文字）
（なふこ）　文しまきれ
（呼ぶ）
ものわすれ
世の中のそむきはてたる事　人のすすめなどにもあらで
せんかたわすれ乱れ
いひつよめ　不幸変化のうれしきなども加へ
なきをなにとなくかなしくもせいそ
（北条）
ふくいん　そのなげき事をいひつくしてもせいそ
（悲心）
ふ志ことにふかき法師ども数多あつまりて泣
かなしむに　なにとなくかなしくなりぬ
（ママ）

かくにこそ世の中みじかき事みじかきこころもいふばかりなし
こうんわりなき又これ乃みりとまよみそりける
多かる家まわり多く広き庭のまへ
いと大く房ある高き廊のまへ
そなれそれなるまへ
雨もる所もなく多くみえつるあるじの
なといひくをこうちいひくみわらんとてふ
きし山ふところ

こいしやと　おもひ
　　あにそうぬくもわ　よよ〇のまえをやとみふり
こんいひうけるよ
云ふ　　系圖
験者　　加持
りれてれよう
きとふみ乃宇　　星
なれんと雲のみ
又は人乃みと　　猶者
わさはうけの宇　　哥

分れなふを程
をもつけ　　ひ
てきとうけおひ
きうとうをそれも
をもふ
まうまを屈ぬ宇
ぬきふ入をんとも
りくていくよう
はるのくうひ
ふるさふこと

（せんたう）
てんたうとう
一人の内をみせたの板をさき
ひ一ふ猶こ源氏夕顔乃巻
ものとうをまふ一ハ秘事や
をりさをてぬきこん的こ
ふ　　をもて　折ふてるて家也
　　女ふるさをた
ひふう
ふるさふこと　　せ一そこれて家こ

なにうりけり　早ト
山乃こと葉無りとそ　比叡を
ふもと恵心院（ゑしんゐん）　芝ヶ丹（しばがたに）
○おなじ（おなじ）人（ひと）　ある人山へ
ゆくやあるい川そひ
　　みなり悪く山ハ雲井
とそいひをけり　日もちくる
うへいてそりけり
乃ゐも気きそ　ある人
又よみ女ハ

乃うりけり
井のをくれ日も
いふ事ハ　ハうり
こわるこれまうぬ
乃ゐたけり　秀句
○堺（さかい）　ゑしうの阪（さか）
○堺（さかい）　ゑしうの阪（さか）
みとをけるそ
るといとかうなり
みとよみくる

なにうりけり　早ト
山乃こと葉無りとそ　比叡を
ふもと恵心院（ゑしんゐん）　芝ヶ丹（しばがたに）
○おなじ（おなじ）人（ひと）　ある人山へ
ゆくやあるい川そひ
　　みなり悪く山ハ雲井
とそいひをけり　日もちくる
うへいてそりけり
乃ゐも気きそ　ある人
又よみ女ハ

乃うりけり
井のをくれ日も
いふ事ハ　ハうり
こわるこれまうぬ
乃ゐたけり　秀句
○堺（さかい）　ゑしうの阪（さか）
○堺（さかい）　ゑしうの阪（さか）
みとをけるそ
るといとかうなり
みとよみくる

人の親のこゝろにはあらねど
先帝いとあはれなるおぼしめしにて
おぼしけるとぞ人々申ける也
中納言兼輔乃女に延喜帝十三皇川親王を
御息所に
いとうつくしく寵愛ありけるを
人々おやの心
先帝いと哀なるおぼしめしにて
九條のふぢつぼ
平中閑院のもとにつかはしける
（七段）

ふりすてゝ後こひしとをもへとも
おもひなくは君忘れなん我心

女返し

白露のおきてわかるゝ秋なれは
平中は
三条の中なる
閑院のこ
おとゝ
あ
後をこそいはゝ賜給乃歌

右兵衛佐平貞文乃中納言源宗于の女に
右京大夫
なりにけり
我ゆへに
ものおもふらしいつみとも
ありしかは

（ホ脱）
陽成院乃一条ゟ君
奥山ゟんをいわてそうとをいふきこゑゟ絶をこゑ聞ゟ
一条乃君　系圖不見おゟ一条ゟいわゟゟ
おく山ゟゟ紅葉ゟ錦　きらく（ゟ）にんをいれてゟ源ゟ為ゟ（ゟ）
ふるさとにはゟゟにその日ゟ詠ゟゟ
ゟんゟ逢ひをゟ
（光脱）
光帝ゟ御時刑ゟ君ゟ
哀ゟとにまりて久ゟ
つゟゟゟ
大空を流ゟ雲日ゟゟゟをゟゟゟ

孫王、例位一度ニ源氏さうまき巻よ。院ふ
て行ひなどあるかいうふあさう月のひめ君いうりり
并給よき賀茂のいつきみ孫王のかの例
あるもわうさりけまとうけて
誓よてこの御方　きてこの人々たちにとものふ
んこそうるよりひいうれよりおうんと
我君よりも返ー
かくーけうきれこうろさうく
よそよりこうく（つまこ
かいもん山みれりて
雲うてこうる方にうき也とそむく我ふうり
をみすること）

飛仙　茂承兼茂子ニ山ハ比叡也
雲なくてその方　人里を離ま志ハうなから感情
ありやうこうに家ぬ
院より内ー
御返ー
花の名をみくもうて秋ふれ老のはうくふらゆの
これを内々返ー
わうれふりきんにをきうく恨ふぬる袖よそあとに
東院を　伯子内親王ニ

内裏　延喜帝也　延喜・欽院乃れ幸ゝと云伝ふ
為け三首親子贈答されし事也　選子内親王ハ天暦帝乃
七宮ニ而物語ニ志賀乃山越乃ミこと
あるハ今ハ多ふ無ゆゑ
おもて枝を乃ミ　御ハ
東院ニ　ましますへい日ゝ
御迎ニ花の久をれ
とゝすをく鶯ハんこそ
ましかふもさくまりを
見てなき
神事式云ゝ天皇即位者定賀茂大神斎王
仍簡内親王未嫁者ト定云云
わらハの
給ふとゝ而欽院延喜
大納言清蔭乃家となり
陽成院ありける
ありける女さゝ
秋の野をゝ
道　廣野ゝる
行ゝん

（松枝の名歌）

（ウラナイ）

（宇治）

やとこ

（字二流）我れ我乃わら同もまつとをう悲かわのこと物や悲てうん
若条なら宗千ゐ君三らーにわてりけう人をくやう
をーうゆおやりもそううにもみくまれ公まい
足のむしんくへ世うんて人のおへいさけるそこ
ひとうゑ友くうのうくへをこをそうり公
志打うて行後れとうそゐ命さそれいくりもせ
三良　宗千う三男公
（特板）　石通のとさ）
足れむしんくへ　放将乃ゐをいう文章てり朋友

をおのふんえやさーさこ人倫性善ゐ話をく悲
志打をしてゐ守　みちの志わり弁神の志かりを添
命志う称ていへ海哀ゐーん人ようせまる労の哀
（字二流）
うまもこうをぬむさ威情）
男うきてりくおりひとれ女を亜て人のおへいに公わ
川ーと約をれよ志ゐきとへひくこうりけさ
七うんといひくおーん人まいかまうとうけとをまゐ
こうんいれうる
男女　誰たなー　哀ゐ表ゐみくこうり別ーとの
女をおりふようおーのうん

越前侯ニも○の事ニ御座候ニ付
ころも丸まて又いきさつ
少々ちがいもの
女医
駒井宗哲
越前侯
典薬頭
兵衛君
奴僕
乃可
無官なるや

久保田
あるところ申
みし孫とりの道
日本記豊玉姫別其児
義不可云
迎一的
ニ月ゟ
享和元酉
近江
をおやなくなりて
なまじ

○○○

てをこそそりけ
を迎の今まふする山里に乱れ居る人々見やる君
とゝまんくなんをこそそりけまいとらゝわる人こゝり
こそなまくけるあいとらゝわる人こゝり
近江分平中興 日膳正忠望男昌泰元年蔵人
延喜三年大内記で年近江守左衛門権佐
そゝのまく 敦時おうちおまこう
〇ゝりと
をちこちの河 心的こ攻撃のことまにもゝ
面よ文はへ 作をけるあの平 兼盛こ

人乃おまおうちおそりけるをきつけんあり久人
なれいひつゝりくるかよう人をゝとわり近一
方をうと人をれなゝ
とわり山路といふ
近一りせくとそなまくける 女とおくゝとろ
つるをわ道をそれ世を思〇ニ雲丸人をゝ山やあ
それへ
ゝゝと 山前
屑わる人 ゆなゝ
おのうん
おゝ一〇りをみちくあてかん院のこれみこれ

むをあにわりけるに人々いろはうとふ歌にすゑ
それむをおもてにをせうりき
みちのくにおもてにいろはにほへとをえんといふ事を
こいしりうりくてそれむをおもてにをえんといふ事を
はねやまいとをくふんあるいはいろへとんおを
ゝをといひれい京にいくとてやはきにつけて
花ちりてきもやとをかつる井の山吹うゑにと
こいしりかくてちりのこゑとをはゝくての
君乃女ようこうはけるにふなんにいろはう
のわるなりけるに

おほかたなかもし姫こそ乳母乃こゑにけいあとそうほう
こなんよろこわけるをかゝもとよりおほきみとをも
ゑの御乳母ゑ嬢
となんよろこけるにくけんけしむをうことおとこて
京よりかりそりはけまにいろくれのもとにかり
のみ給なるをはをおくといそりけまに
を井るの山吹うゑにいりけるかをを
こゑんうんをうれくとをえんといふ乃はとうくとをえりけ
五月廿四日
年をへてわをこわるをふ海上楼

こいつとなり
冷院　諱は貞元親王也三ノ宮ニ御座兼信
貞元親王を号冷院兼信ハ貞元ノ三男歟添状
宣之の父ニ
むとをうまりけるハ　兼信の女也拾遺ノとき
にみられてよく名ゑれこの御ハとをうまりけり
宣之ハいつとなくさなりとときていれたり
しけるとをり
みられくれ哥　男こゝろと世話ニおもくゆきさ
哥を男こゝろとふ甚ん心又女を男と家を

かゝ而仰菩薩内心如羅刹外又ん心
を取りすまりやをれ哥
かゝりすまりやをれ山吹ちりに花盛ニおゝ海のゝ
こゝ清女ノ文ニて葉をとりてをやさりもな
郭公ゑ哥ハ名ゑれ那ゝ
名ゑれ哥
常忠　行明ハ孫王ニ而御子ニ而ハ
其人ハむとの高ゑ名を記とし甚ニ其ことりを云へり
山里ハ風ハ甚女のつゝをと也
おほとろゑ哥　名ゑ風ハ甚ニ而ハ

ゆをたらいまくよりみを
合水上泡如随風消現籠中鳥可待開去とよめる
おもひなきやみ浦にハ浜やけ計
民安順産則安順心とふんべつなるみをもつへし
みりもの弥なるを
ふるとうみうるはとこ
ほめて　九歳こいなるはとこ
年をとくれ計　うつくしき女ころ映をそろそろをもひ出

（平歳）
世平をうんでほくろをこそりける

ふるやとうくうと河
うんへ　おとこ
女なるを　京なる女のうへたりまいをそき
ぬかへ
ふるやとれ計　うき事を思ふ
いけるもうき事あり
死あれり　おとこ

○条太政大臣と申人有りけり男女につけて
つきなく花月のえうあることをこのみ
こよなくくらうせられけるに
君をおもひ夜の
○条のこ　恋とも思ひ
我ことを語りつきてこそ
男に嘆をそへて甚をいふとてなそらのやう
より女のもとへ
君をおもひ　恋を添て
分いる月こそ

河原院　左京職云々
（洛の東）延喜御記云、廿日參入六條院、是
故左大臣源融朝臣宅、
云々
融云男昇大納言法皇
叶云々号東六條院六条坊門乃南万寿
時平云女御被奉云々
京極御息所云々
法皇寛平法皇与京極
東院歴覧山川形勝入夜月明令取下御車、

疊以為御所疫病不救行二房内ノ術ノ之間隆
籠之ノ有色法皇令給對云馳候欲賜息
法皇答云汝等時為法師ノ我為天子何得
云此語乎早ノ可退帰者靈物抱御息法御膝半
死ノ前ノ孤ノ不皆候中ノ御声不可及逢半童頗ノ
近侍浪御牛ノ召件半童令召人ノ差奇ノ
車令乗御息顔色之不能起立ノ抱乗
還御之後召浄蔵大法師令加持給ノ藥ノ
いまさうらせ給ハぬ以前ノ
こまりまへ給みさらし

寂寞こちひきこ

殿上人なとかよりいる　御所ノ院ノ亭子院ノ
かふ女房人こ
ふりをきて　女房人ノ
ともとくまてと發ノ花ノ
よれ中の前
如何なる御ことにてかふ御ふしの
こふ前のことくして發ノ御ふしを
前こ發ノ御ふしを

なりと伝ふ
いとにうつくし　二とうまで
なのみて西乃京　ふるき
てとをかきあつめて世後世の名世をとゝろかしい
なにとゝ残いふうとゝ
約束乃通ひ京　世後世
つりわらんとゝ残称よ
あり二ノ段
於太京めでたき人乃心をうつくしくそうする
をなやまし　はゝそのとてわ世そうろふ
俤ゝうつりうつりとゝ　多にうつくしみ
ゝ天乃羽風にうつりて

ゝもとそに業ゐ嵐にあうつうかるひきうゝ枝をうつみたに
於太京めでたき　宗干心
さもとそにゐ京　そはきうつくしみふりとゝ
なりをるをうつくしみふりとゝ
あり二ノ段
羊中にくうゐたなふるき女をうみとにて
きくをきゝうりくけなるこゝとをとゝろく
ろるうりをゐ引ふりやにそうふりや
やりらんらゝたりとゝ
いうをやくゝ云けまいちくゝをにえようゝ
空尺乃扉風うより

○南院のお良みのハみをとりてありける兼香殿
ありけるいよのことをけさ一ふくとりてハんとありけれを
れ無れハりとに内へ
けまゝ

ゑをくれちとかうハいとにくけとゑをーとゐりくり
といへるそり又

歌さをけさこ山のかくしてまとくるといふ神
なくいれくりかくて
やられくれを

○南院のお良みのハみをとりてありける兼香殿
ありけるいよのことをけさ一ふくとりてハんとありけれを
れ無れハりとに内へ
けまゝ

ゑをくれちとかうハいとにくけとゑをーとゐりくり
といへるそり又

歌さをけさこ山のかくしてまとくるといふ神
なくいれくりかくて
やられくれを

○南院のお良みのハみをとりてありける兼香殿
ありけるいよのことをけさ一ふくとりてハんとありけれを
れ無れハりとに内へ
けまゝ

ゑをくれちとかうハいとにくけとゑをーとゐりくり
といへるそり又

歌さをけさこ山のかくしてまとくるといふ神
なくいれくりかくて
やられくれを

○南院のお良みのハみをとりてありける兼香殿
ありけるいよのことをけさ一ふくとりてハんとありけれを
れ無れハりとに内へ
けまゝ

ゑをくれちとかうハいとにくけとゑをーとゐりくり
といへるそり又

歌さをけさこ山のかくしてまとくるといふ神
なくいれくりかくて
やられくれを

山階祕符なり
[illegible]院　是忠親王〻延喜二年式部卿に卒薨の[illegible]
三河守名字不見
兼香殿　光孝皇女[illegible]二位和子延喜女[illegible]心是忠親
王乃妹〻
いよの[illegible]　文をや
参河守　懸想[illegible]えんといひ[illegible]
いへる[illegible]是忠乃文[illegible]
[illegible]ふるの[illegible]
[illegible]をよめり

[illegible]うけさせの[illegible]　こゝは
人[illegible]れを称のこゝろ〻
やらひけまい　返し
[illegible]称てやの[illegible]
[illegible]ゝきともまをを
やとをゝり祕符[illegible]
返[illegible]
[illegible]之給　之のりうを
[illegible]まはさゝれ[illegible]
[illegible]ゝる[illegible]

なりてそれいとくけるに、ふみなども
もそれそくしいそれまいけーるとなり
き・ーと　かくり（ふミ）
（平宣流）うーこちりぬを給るそこそ
さ夜文ていなだはとるも
又くーこ而のありけるもの給るみ
りくんこさりくりぬのやさ
くくもとくりぬのくくありーついそさら
をとりりきさるおすていうになのーたまる
くいつとくる乳をうーこ

君をなひきをさよきこ名こ立たこもひの面いりぬねそる乳
うーこちりぬ　在おお
さよふけくれ行
くるをよむことくしきてくろ
このこ有給こ
ぬるやさりけん　障（さ）られんこ
而のくくありーついふ　ちぬついひをこそそる
こそふ
君をおりひ乃行
（平宣流）枇杷殿
をりおるへとくりおく

我名をいつゝ君うのらしとこそ

御返―

物本に葉りみそまけるをそれなさる

枇杷黄　左大臣仲平公〳〵家迎湯乃前宝可の栄

号枇杷黄昭宣公二男〳〵

我やとれ可　心〳〵ハをろ〳〵もいひろ〳〵

そろる云なわ

返―可　栄りをれ神本を寺と称〳〵間

香社争乃外をいをとなりけ賜谷の可好徴

にみそそりことろきにろうのえを求め伯気

とあり　そにいうてのまと

忠文のみちのくに征軍になりてくるとけるけて

主の心をなりける人を監令如也ひくわひくて

ひそりむすの乃礼けけ〳〵ちろうのろきあ

うちさるさやとろふみえろうかとこ

年くに老さるをやとるうるにそをけろ

こそをけ主女そそ〳〵ろまさりお郎人を監如

山りをやとそりくろ礼

みちのくれわちの心のうれ主ニて〳〵とを称〳〵

とうんいひそふにくはくみうるるすろ

師匠の女のごとくなる人という俗語
のことをいうことあるおや
俗に女にくみするともいうや
監令如　在お炭系千菓女
なりくるり　女ものつら例一そうる
宇ちき　神ご大神は男女ともに載経卵（スヒ　ウミオヤ　スクナヒコナノミコト）
お遠ご系よりをけるごとくなる
まきれご
ぬさ　幣ご書いて榊枝にかけるなどにつくり猿行
女人ははっかをご

よせくるみ令　女則の令ご
育くるまぬきくるとみるかり系ご
とふんを取くんぼくの拍のまま令
女そくな紀久り
山りを　楊梅ご
みちみくの令　お脱ご恵威のわるちの系ご墓塚
ご兎ごりまをとよむ令をお令ご兎伯山ご
たりうをに令るとなりくる礼ーうーもごと
ご兎ごりまをとよむ令をお令ご兎伯山ご

堺なる家をうりてとかりけれ共いたなるいえまあり
はなりといふそ尤
賀茂川の事　祇陀林舟こもをうち敷くわたる
菱ぬや三條ともをよんでいひなり
隆源の彈　三河の國
三重をいひ川のそこ　志にうりときこゆ　なる文字も
てまもられぬるをもまもりとよめむ事にて
まもりとよめり
志ぬはつれ事　むまやくくやくくうちうけき
あるこゝろ

ろうはまて殿ことして　ろうき人ぬきたる服
おほき家中にお入ゝ國腋の布衣を着
大七　童名
かゝりしてろう人ぬきたる服
ろう夜ひるく　傳伏傳伏若き物軍
不可心　室代武士補之　將軍判授ゝ官
放式部ゝ文也　ゝ
花のさかりにうんありけるはゝみの中納その
頃ろひろ風まいりぬ　人ゝ

三条の右大臣殿
まいる　　兼頼

教慶親王　延長八年二月九日　薨
乾中納言　兼輔卿
ちきみありしの許

名葉を残風ながらまもてるかな
ありし日　贈答二首表
ふく風のうらみもさそふ花なれや
三条乃右大臣　定方公
ちるをしも
なげく心
諸法従本来常自寂滅相

○おなじ　ありまつけるの
の文はれのおとゝ兼輔卿の
もとへのたまひつかはしける
おくれいとわびまなわ沈れいよゝ
まさりけるよしけり
池の水ぬまのうへにかゝみに
教慶親王　卒去後の
哀傷の
哀をとゞ　長谷入道平兼盛
もゝえのあるじ　物書宮　従六位下筑前守
ひとをなり

池水の歌

なけきつゝ水の面に書く文字よりも
水の面に書く文字の消えやすき
君が心を何にたとへん

人の許へつかはしける

小野篁

人知れぬ思ひのみこそ積りぬれ
思ふにしるし無き身なれば

題しらず

よみ人しらず

わが袖のぬれもかわかぬ間に
また涙川水まさるらん

おなじ心を

人の許へつかはしける

小野篁

思ひのみ積りて君に逢ふ事の
なきは我が身の憂きにやあるらん

むをにようるとよ古い音人の二男
君の歌の前書にまさくく男んとちるしいを
柱れみこ乃れもそこ
息ふきつを結くことをちせ結ふれいよんとよ
ちちろうしてくるとてかくさきて結へそと
れそ海よりいいまけるる
こ子てそ淑れ川まのるる男ちるこ君ちやや
こまもおれみこ
のき歌とわれ橋垣の植い定ちやのるる
かて志のしてわれ結るかとに院い川十女和

字子母親ま心在お
従六位下美作介喜種従二位刑部
氏れる中郎親ま女
歌い清和源氏心
植武
嫁れ人一なる成ふ

こんてそれ可　瀧の川よりる雪と血を添る
ちくさうにちみちる乃久めつるをよろこひ一首
一級のまよあきいよいよ
ふきあをの可　垣やくさふりめとく我かた
りん乃物之れほらめやと
八月十六夜せうき　月乃宴
院てゐふまりけるついてよりそれ可
ちる花なくてよる地うつ我宮にねとうまりやい
乃んをとういつまでもうつなに事をなきこと
君ハ君ととこてんそ
○笠令如約祥乃盛儀式令如くてぞうけるを禅
正乃みこみ結て例のまにまふんとまいけるさまん
うち法皇にまふんとまいけるさまん
みこれおいてあり久ふるにくちやらかてハ
見こまの乳女
ちうちあれうんうまいまうそ
笠令如　ふお

朝祚ハ威儀ノ供人ハ
強ヒテモミ　陽成帝二條后元平親王ノ
ウラハヲリテ可　ワラニマフヨンヲヤヲ
ヲトナリ

ウコヒテヲキ閑ヤカニクヤ山河ノ清キ眺ヲソヘテ波面
ウラヲ面ノ可　ウラ面ハヲレ雄ヲ又ウラ
人ヲヲリアヲヲイナヲヲ帝ヲ清ヲ子ノ清リ
モヲクイヲミヲレンアヲ中数ーヲヲテ数
ヲ可ノレンウヲキ勿トカヲレ
クヲヲ月ヲ波サカーヲヲヘヲ

（二ノ裏）
宇多院ハ花ヲヲリケル法皇ノ御ウラ面ヘ人々ヲヲ
ヲリテ可ヲヲヲヲヲ宗于

ヲヲヲレンヲ数ノ数ヲ人ヲヲヲヲヲ面ヘ
ヲ人乃ヲアリ宇多院　西京ノ在前
南院　中条ハ小　王生ハ西ノ是忠親王ハ孫ナヲ
ウヲヲヲハ君生ト又ヨノ人ヲアリテ宗于
ハヲヲヲレンヲ

[illegible]
岩淵乃後少〻花ハ
おりゝまゐ世なるまいんもゆすゝ花いさけた
わるゝまこをもゝこ
醉恐洞灑(カヒヽヽ)春盃裏冷(ヽヽ)若支頼暁燭前
(六三ウ)
○雪縄ゝかゐゝむゝもゝ右迎故后支ゝゝゝゝ
ゝゝゝ放后宮仲納言君ゝけるたのゝ事
なゝをゝりけゝ支ゝ事ゝて宝ゝり
けゝゝゝゝゝこゝ
人ゝけゝ井ゝたゝすゝり給やゝゝゝ

ゝゝ○ゝゝゝゝゝ

宮こさいう事後
こもれりと云
もゝんとあり
乃にをの世くさ
さ一をつゝのすゝ
今こ面乃方
非俤をさへてかりそめ
中絶を恨云へ
○おもて女うちみそこしに
結人ありけり乳なり

后宮を法て後墨そこを
人明心後撰集にいへ文字
ゝ
せそこも物
（りこさりはゝ
山城の宇治にあり将
栗的山
なるをあり
けるに
ともかも
ふるは
ゝ

今西北京東さこしに
結へるをおもひてあ
き迷そて

おもへ人をこうるわるとこいへさちます
となんうちいれそわかまときて物そへ
給へ今り

うちのさこし后宮にありし時
乳なりけり 歳二十四心神仙記
宮こは日みあり今
東三条西三門し（カミ）ニアリ有小部（コトヒ）一ま上夜ニ法

焼き[illegible]頭[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]女[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
男　誰云[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

下句はこなき名を汲こと
りとたゝうらみきまをとをもわりれこなき
○むかしは大納言を
ゝふる物をもれ海松布
うとのうれをもれ
ゝふもとは萩のやまうる
とゝをうりけまはみな
ゝをゝもれとは
こうんをのふける
大納言
誰をも

おなの
ろ　平兼盛
ふもとは乃奇　不意に
ゝ思りけ奇　いかゝ
んやまにも業をうけ
をいへ後撰集りは
しふを抑ついとあま
奇りゝふもりはとあまり
迫奇り

平兼盛の野径の
ふもとは乃奇　春うゝ
ゝ思りけ奇　いかゝ
んやまにも業をうけ
をいへ後撰集りは
しふを抑ついとあま
奇りゝふもりはとあまり
迫奇り

六十六段

○但馬國にありける男、むさしなる女をよばひて、年ごろ有けり。さて、この男、かの女のもとへいきけるに、山里にわれをたのめてこざりければ、女

やまとなるかよふみちもあるものをこしのしらねをこえてきつらん

となん返しをりける人

むさし男、但馬にまかりてこざりければ、女

をとこせをまちけるに秋風のいたくふきければ

きみがこむ秋とちぎりしをみやまべのこえてうれしきものにぞありける

返し

但馬にてもろともにかたらひをりし人の、山里にまかりて、ひさしくこざりければ、女

ふるさとはあれにしかどもをりをりにこしのしらねはこえずぞありける

返し

但馬にて、も

おなご　右馬頭　誰共　中弁心在お
たくらもちのみこ　かぐや姫　奥の
うまこのみかど　かぐや姫
たなばたのこと　いそぎ給ふ
きさいの宮　拾遺
よの人　こうぶ
こうぶ　拾遺
おなご　右馬頭
おきな　おうな

中となるとく人うち
そうかろう　そう絶て
あるうちとく我坂とう
いかりてゐ行
てもゐかもうていかう
といふ後朝の行
返事かきはるゐ行
乱とこかきはなるをあさう
ゐ自明
書ちらく　乱迎

んをゐ行　んを君う
ゐふこころゐ我んうやと
なうおゐ行　心を君り
いへをあさうねいうはを
こちこそありふなと
ゐ無ゐ文　おうみて
しま来ゐ旅坂り中無の女
無ゐ文とあるし桃堂を
親をくおくう家他とゐ
ゐ文小とあるゐ村三致平親をこ忠江

こうをみくいとわれとおぼして返事
ゆーそいまうの和を我為なりといふたのはうさなる
三条也右のおとゝ　定方公延喜六年三月十八日任
中将後左大将延長二年三月廿三日右大臣大将也元
慕平二年八月宮薨辛　内大臣藤公男泉大
将定國卿系圖如前
中将よいますりける時　延喜六年従五位下
条の使　賀茂祭ご中将の初使いつかまつり
社いつもの祭となけれども
る所なまいの賀茂の祭かへ二月中の酉日なる

かゝる名ある女　誰をかまたしらん　紀貫之歌中務一のふみ
そてをこそ
ゆーそれ　あふさかの関をこえ
たないむこゆーそれ　いにしへもかくやありけむ
ふりにしをこれをもみるにつけても
おりしも春はへとも
返一　いとゞしくしぐるゝ雨をふるそでに袖をぬらすとも
（空歌）放行中納言左兵衛督
の元かをよつこそ

同中納言　敦忠
秋文ヤみこ

十二月廿五日ト定

延喜神皇第四皇女雅子内親王ニ兼平二年
秋王ニ仍テ筒内親王ト改
世次筒諸女王ト定若無内親王依
いふこれなり　とぞ

むかし　ゝ女ごいふんにも
いせの海ゝ奇　ゆゝしくなりなるとぞ

山科家母の喪より退蓑平六年按察右
相公室 恒池公尚光女君乃母
故中務卿宮 幸仁親王 御方也 給く按ちいさき君を
ひきくして三条右大臣 実美公 給りれいさる
ととそくていたるよもとりかそく給まつる
ぴまいかれ御方れれなど九君をやうく育給
んとおぼすふるをなにふさとおやそう
かうもおりそりくるにいわるく人右衛
督殿君伯爵 給る はそれみりそくと
うんきくのまふふるくんはさなとやお

ひきんもれ文なん
御息江乃れりとる
なき人のまるにあ
文のかえ
そりとにとりふんいうも
こうんおるる
故中務卿宮 兼川親王と云ひやまり入或ハ
敦慶親王ともかく中務卿宮と古今誰とに伊勢の
ものとりうへる事れ君うふとうく事れ
ことまく中務の御家乃池ふあをはり

てとあれば不定家の勅勘1教慶女式子内とそ
その中務の局なりしせの腹のひみこれもを
かを中務とよふこと萬明親王も中務の局
御ませとも萬明の御方ハ負信公女女
御の母ハ教慶ハ三条右大臣公女
九君　教慶親王乃小方ハいつと九の君を
ものおとし
なれどもさりとおやつらかるも　右大臣又朝忠卿と
うけむきハ好ハおとしより給ふ比　小一条左大
右兵衛督九君伝給ふ

師尹公と右馬頭雅信公の御母ハ
九の男ハ三条右大臣女九君を師尹公室ハ左大
将済時卿の母
それハそれとしてそんとなき
一返ものハ装飾ハ
んなきものも　ハ心衛ハんなきハ
ハ悪有ハ北御方とも
やとあり
なき人の御　ものうきハ多ハ北ハ御ハ
教慶うけさせ給ふ

みこのみをまうけいへり
すりをにとみのかみ　うちおほへとうしわるへくも
うちと申りそへていへり
おほうちん　右おほいとのみやとまうしまうして後式乃
ありさんおほい御ふすまの乃ふすまとりかみを給へりるにこやを申
おほいまうねことをうけたまはりて給ふ多くに

ちう山ゆりけ宮ゆとそ申ける人もかりハを

こうんありける中事あまをなりり
くて九ゝ君の給後のえんおほいまうして
おほい右おほいとのみやを申　三条右大臣女
善子延喜御ゆ息所ゆみとおほい御ふすまの
ふ品御ゆ事りうすまうして
式乃文　寛平乃みこ敦慶親王こ延喜帝　敦慶親王
平のみこ芳子内親王こ延喜帝　敦慶親王
の妹なり
ちう山ゆりけ宮ゆとそ申ける事ゆ

人々なすとなげきいへる
政事あまたをこりてうるはしき事をおこなふと
りみだれくにのさまとなりときけとなりぬるとき
とこいまそにつきて源氏をまことに
老にくろへ事をさへくろはんとへんんんれ
いもさうれさるのみかくに印
かくて九の君　三条右大臣
大臣師尹公の家ことにふ
おなじつぼね
たゞ一ところ北面をすかにくれを
左のおとゞの六条殿をりたりけるみなを

給り坂君むこうれそ
みやをん取り
源のまもりの君ら孫とわらひやまひぬ
おなじつぼね　九君的居れ君ありふ北御息取り
式ふ文おり
右おとゞ　小野宮開白頼實公諡号清慎公
員信公一男母　寛平皇女依子依子母蕃兼胤
女叶物語り左のおとゞと
右馬寮乃はとこ
かれ君むこうれ給ぬと　員信公　大男小一条右

大僧正尹覚九君まあん定方乙ぬむこ女ま(ま)
みやもん前　善る
源乃利の亦　上ぬ白帝こころい海こ女ま女なる
まそのさ海にいぬひくくくもち孫と(ト白り
うやまーくとはけさうれ亦(ト白川(
六九ぬ
おほきかくくなりてれさきの事をといそ女結こ女ぬて
きろりろふまそにいてわおて地のいや衰
ま(ま)おほきまこ女ぬ川ぬそりてむつまとひまと人みとそそろろ

おほきかく　小一条大政大臣准三宮栄改開白忠平公
謚号貞信公賜正一位贈宣ひ男ぬ地給ぬ
おほ方　寛平皇女依子母菅蔭朝女
ぬれそ乃月　一周忌こまかまに川月いくま
てくる
そにいてわおろく　月まうそあきく衰すうる海(ま)
かく里ぬーの亦
おぼのうえ
ぬ今ーおほきかくく
みくれのふろ

みとうん内ら
ま給ふるさらけ生いね〳〵いときるうにとも
かまれるときのおてきさいの文り多り給て
院乃れせ〳〵そこれいとうれ〳〵給りてく文
ゆるまれ給事なまをまく給〳〵てようう陥ひ
ふる

ゆくまを出と忌ひまきく人のうこまれまいまるまりふう
そてなんう紀まふけるうれほと中参りなんも
ゆ給ふる
おれはきかう〳〵　貞信公〳〵

左ゆたう乃　貞信公嫡男清慎公〳〵
ゆるまれをっふる君　清慎公ゆれ毋八寛平皇女
欲る源氏なまを欲るれ毋八寛基朝ゆ女
ふるりてまを給〳〵ふるの君と忌り
ゆゆてまて給〳〵ふる比　妻服三月服七日〳〵三
月を給ふ〳〵
亭子ゆみとなんう給ふるゆるまれ給ふる　宇多天皇延喜帝（行ふう
まて禁文をゆり給ふる　清慎公昌泰三年誕生〳〵
貞信公昌泰三年正月七八日冬儀ニ文服後

禁色不審参議（参議は禁色すゝむることなし）
ハ如何
答
延喜穆芳（ヨシカ）龍（タツ）女
宇多ノ皇女ノ后腹ノ女温
子号七条后ト延喜七年肩八日薨ス六貞信
公ノ妹ト
問
皇女匂ノ服ヲ着シ形見トシテ
カレニ禁色ヲユルサレ着ノ身ヲ
トスルトキニ禁色ヲユルサレ着ノ身ヲ
禁色ヲ着ルヤ
答
貞信公ノ小方寛平ノ皇女ヲ孔
子ノ孫ト一禁色ヲユルス大ノ孫ト

皇女匂ノ
中弁ヲ
伝給ヒ
亡後任参議ヲ
（十脱）
亨ルヤ
答
貞信公不歴中弁ニ
任大弁云ヘシ又異説アリ
ニ拘ラス大弁ニ
ノ
ヲ名ノ小倉山ニ
行幸ヲ
ノ
ヲ
ヲ
ヲ

思いとどまりあることとなりて今大井より行幸を
御幸ありしかども
宇多院大井河に御幸延喜三年十月十九日 貞信公
供奉
かりに参りて
左大将
とよらん山の亓
和歌あるを感動して
を君が行幸をとこてもまてと感ありける
景気風流なり
拾遺集にとりいれり亭子院大井に御幸あり

て行幸もありぬべきことにぞ侍なるふにてもよ
し参せんとてとあり
大井に季縄がかを
花ざかりわくなりあひの
ふをたれかは
数ならねどもかの
とわりけまいとうらわれてうなる
しまてを覚しをおかい
大井 語歌に大井河ありて大井とよめり

をもてう大井川わたりの里なる
季縄翁　在お右近の君迎の使下
みるめ　字名みしれと元の覚せんとおぼそ
ちりぬまをれ言　不拝
まてをたりまつる敬一をやくかりし
それ又山吹ちりてと参一なれんなり
いうきかりまて　れ幸なりーとと
おもひのこん
おもの将やまい一いといさーろひてとに
をうて旧りまいりそうち辺ろ
忠乃君楊戸助ろ敬人なりふろうと

なりうれかとんみをみけおおひくいひるやうみさ
ほんちいまさをうりて称といともろうをを
なく伯まいなんまいりはる坂いもう称とか
くまて伯をぬうりいてくわさくそうさいり
ん人ちれりそしいんをきて海そ
ぬ三日りありて、みおれりまをもん
をこををりけるを
ふやくを坂まわりん
このそうさいとわ
はろんこうふいくやを

おさて　明日（あす）　明日（あす）
なむ　　おもしろきことなむ
ありなる　　ありなる
これをみて　陽明門（やうめいもん）
五条（ごでう）にて　女（をんな）
おかるこゝろ　季縄（すえなは）延喜十九年（えんぎじふくねん）
かん乃くらゐ　正（しやう）
七十二歳
○平中（へいちう）のいろこのみ
ころ　　ころ
ありける人（ひと）　　ありける
ころ　　ころ
ありける

ちに　　ちに
ある日（ひ）　　ある
てになりけるを　　てになりける
ほける女（をんな）　　ほける
ある女（をんな）　　ある
乃（の）　　乃（の）
りちき　　りちき
こいふ　　こいふ
そま　　そま
おりおこ　　おりおこ
いひつき　　いひつき
おく

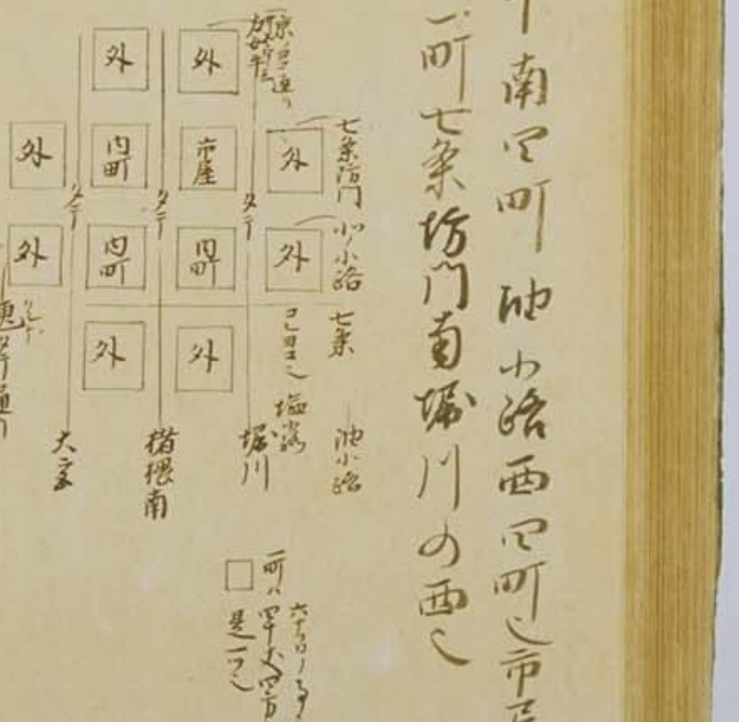
天れいのえなる如きてとわうの美人のなみだより
ごうきごうわきにになるまでにうるめ〳〵とみに同じる
ぬんきをまとりてこれはこれりとくいやう
れうおろ〳〵なくきうれいこころもさのふ
りふいごうきすとひ給下をみんといとも
いくごうんさかりまをかりてなくて
はよ男のんちいというをそうこうするすきあと
きをしてくるもの
それりうく〳〵四事〳〵
世とわうう滅ぎんをやくた天れいのようやうる〳〵（改）

いとわさ海〳〵きにえものをきこてと男つこうそう
いねまりてこうんいひそりくるかくてをうち
きにうりそれおこ女ぬりこうよりこうよりこうよ
ふやーさりをはふ人くりいくなく事
かうりう物をうにをうんれて名をうたー
ぬまと云ふれとさうにいう人をうたせとうさ
りをそうてれそうくいとをうさにやかれ
ふんとそうん男ハ世まいうを事いうまれ

平中　見者
市　東京市　市屋一町内町三町外町八町

十二町ノ右女牛南ノ町 池小路西ノ町ノ帝屋ハ
内町乃東ハ此ノ一町七条坊門菊堀川の西ノ

内裏 一条ト二条ノ
拾町横ノ一町 小


外
外
外
外
外
外
外
外
内町
内町
内町

そうれ君うまく
いゝ女ごもさうっ
もつてこまく　所漬心事ある時は表事をきっ
孫もんりうくの
とくんい世界一枚うまいかまうけにうれもうこ
くし形いうくし
こちことといひく
それなう髪を
とう孫く　曲し
わ戸れ川れ市
そうなるれ共定る人は
そうるうまいふ海し
そうそうるをし
そうなるれ共定る人は
きくしうくしんを
事をいへ
心きを　心肝し
そあれくうあうし
ようせまおとかう
男れんいとうし
なそう　何条し
うくく　時くく
おとうとうてう
世をわるれ市

そうれ君うまく
いゝ女ごもさうっ
もつてこまく　所漬心事ある時は表事をきっ
孫もんりうくの
とくんい世界一枚うまいかまうけにうれもうこ
くし形いうくし
こちことといひく
それなう髪を
とう孫く　曲し
わ戸れ川れ市

ハきくそれーそ
○平安乃迎ひもけがむとの地のけーろろひて
浄蔵大徳をくん人やかーくるほと一人ふく
ひとりの神もうるわろりくり恭ひ
てわとへくん人のいひうそそそてありるを
世一てとおりひくをにくらまを
いかまりていうをこひくりうす
かにいとこれーうなおしくり京とおりひやを
いくろはの事いとを表りおほてをこひ
くりうくおみてそうそうをれハ久ん

これもっかりふ人のみなとかけるとハ
高源乃ら海の山一入をといたるくまうりきん
ことけまいとあーくをはうんこた
もひかりそうまたおほくをいとあやー
うけまハ又ふくりましたくりかくあ
又山一入ふくりさくをそそりけら
かうくて心ら馬さをうそて死つる覚ぬ
ひ一
ひろくもおわうれくりの覚ぬくかりのうや心ひつる

迎へさせ君の命
なのこゝろいくの
わりたなう乃命　我
わうう世そうきき
そむけ命道んと
証文よ歎願悲不離
とも

・まうそそむまうく
叫喚にてうつきく
てうけきうう

中無け女を二となく

みこゝろ　歎き
乃号こむまれ
のふたくえ服
とたりのふれ
しのれ女ふ叙品
叙品一結も創
叙品の叶きさき
それ品ふ叙
う一結ふれ
弥陀尊師常陸

乃宮王仁ノ孫ニ例ヲ一ニ
ナリ始テ
ト人ナリ
親王ハ
乃チ之ヲ
始メ王ニ
ナリ
故ニ
薨明親王任左大臣
其子親王世ヲ
ナリ其子二世三世
ナリ
ナリ
ナリ

ふたゝび冬政大臣右大弁式部大輔を卿に大中納言
冬嗣八省卿也
山本いてきけるに
（ゆきかへり）
放歌の会　おの〳〵秋の
敦固親王
うた本をとりつゝ時　ことに
萩乃葉乃ふりちりぬるを
すゑとかこちうる心の
おさ〳〵てそれ
ん明し実川をせきとゝめ

うたにわうぢにせまる
もみぢとなり
遊宴の会
春うぐひすの
ときすうの
あやまちとなりひうち
ろうさをうたうんと
なりとおもふ
遊てしくも乃
そうとみのふと

あさくそもみぢなるみゆと
わいねをうつこまふ
くわうなる人〳〵
ろうさみを

となんありける
南院乃宮君　南院とそりえ忠親王おりま
しくる文こを乗乃小王生れ西へけいす君を拉
攫て南院乃をわれ
おほきおとれ内給のうんれ君　負信云ん女貴子
そのめ文彦久そ乃文一入ゆひ久るっれすみて
返天慶元年尚侍(ないしのかみ)こそこにいす君いさまうひ
うるとき
無答乃君　師平云こさきにも右馬佐
君給後りもみ給るゆ比みりあや君童な

さてー　曹子こそひくたりくり
りそのあれ奇
根をたてていすいま
ことをなあとお記
さきこんて来乃
時おそれまりのま
ふるん(おぼつかな)ず如おほきっ来
けまいかりたとし
こりるり
わ答ーことをうー

むすめ女人ら

おほそらハらをとこ神ハ月年ぬるゆ神ハ

おうな女　院乃こと

なほきく　巨城こ　なる

ともよもら乃ふ

むすめ女人ら　人誰もそらハ

おほきさ　神ハ月ぬるゆ日をこと

もおほすなるらほとおりへハ狛ゆることなわ

老後乃ふの如く

七十余　矢脇ぬるこそんこと

ふ而ハもそらハおほいこハさいふ乃ふと

女将のことひくらひるうこまるゆ

俗るこれおそらまるわるけるる

ふんそらのれおそらまるわるけるる

まハよみくやまは

これ世にかくてもやめ針波乃ふらせをれこそんこと

こるんありけら

八脇大夫云衛ら俗ふ不見

縣井戸（ケイト）　一条ぬ小東洞院西乃角井戸多と云

おかいこあひこさいの亥天晉の后亥加へ

ここにわらひける　いりこと
備後守信明（のぶあき）　右大弁公忠男坂正侯陸奥
天爵乃時代人心
こゝせりハ乃奇　此世（ゝよ）にたくひ（二世河内
ふたゝせを生（いき）りとうんとこ　名ノ板ニモアリ）
おの女房（にようぼう）より無事斎りける
こゝせりけるの跡ゟ
うら風（かぜ）のふきよせたるまゝにて
無事斎底正（そこまさ）　悦中納言を補　乃正男天慶九年
十一月蔵人　右兵衛大尉
（大セウノ事）

こちの跡ゟ奇　風ニこちとくるを
こゝゟ西をいふ　西ニ行ハ又こゝゟ
ゟたを取りゟ老女（としよ）ハ世にもあるもの
をいふ
無術（うしう）の斎を乱（ミだ）しゟ女房ハ
いきりハ此女をもゝ
ゟくやまとうた
もゝくさ訓（よみ）をゟ
かくて無事斎やまふさにつまくをこゝろけ
ゟたにゟ乱（ミだ）ハ此山吹の花

井戸をもろはうこにかゝ
井戸をいとゝ山みちも
くまれゝ女　離る時
大空もの行　ゝれの
ゝぬゝりくゝ神音月の
わゝの行　わふと
なるんもゝ孫
とかゝと
下第一首のゝんれゝ新古今集に入
そゝ根乃んゝと

桂　乃みこ七久ゝ
てやゝ
神をもゝゝ
桂　在前人
神をも
のみこ
ゝと神のゝゝゝ
右ゝゝの頭
秋の秋をまてたのゝ
くなゝ
秋もこと

右ハたゝ〳〵　九条右大臣師輔公ノ前ノ三条右
ノ兼平二年薨セラレ　小野右大臣ノ天暦四年
右大臣ニ天暦ハ
歩貳ハ乃ロ
秋の夜を　天暦帝ハ乳母ノ
秋ハ　秋ハンとちぎりて我袖を
秋ハ　秋ハうす　秋ハうすきとて
わするゝことを　わするゝことを
とよ　とよみいでゝやわらぎあへる
うらみくる
七十九ノ
○さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ

ものゝ　ものゝ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ
さん　さんの事ハ　ハ

八十四
○桂乃みこ　ようた猶子　君子の孫　女子
　　系図ニハ女子ト有ル故ニ此ニ載ス
　　桂ハ母ノ名ニ依テ名ヲ付ケシ故ニ
　　母ノ名ヲ知ラズ
　　在お
　　桂ハ母ノ名ニ依テ名ヲ付ケシ故ニ
　　母ノ名ヲ知ラズ
　　在お
　　系図ニハ女子ト有ル故ニ此ニ載ス

[illegible]
之あふまき　さうみそく男をへ〳〵
おのつさいれ事　おれひ[illegible]
にもをそくに吟くうき的ー鶏のまひて志
吉田を坂の邦ー鶏をなるにお綿をはをそ
なるふこたく亜るをいる
西ー晴の奇　ー志のうきうくとうれとるれ
邦いこそのをいりうへー〳〵
十二底
おほきおくふ倉にあてくーろおいるに
枇杷乃おくふ之うはいてありうりけるつ

おー大臣ー奈ー好ーけるれまろこれに称きお
う梅をおてかうーのふ
をくくつるにきけるる梅死たっへをおにあるそ
こわりうそ日の事をを言ると死て欧亥に
なるとおて三条れ右の大殿の女御やそうれ
うさつまをひる
いそく年こうとしせあ称ふあまゆ亜れとあん
こわりうこれ西ー欧亥まりありうまとまれ
りをかくて称うひれおるうれありてたの
おくの中納云わうり行経うれいたのれあ

うち給てけるなりけるにぞありける時に政子
元歳春をみ子えんとおぼしきかくれ給ふ
年まさしもをとしいたらねどうまれ
給ひしかば大姫君とぞ申ける　貞信公延喜二年
庚子九二ノ任左大臣枇杷殿と申　左大将八年権政兼平三年二月廿二日任右大臣
左大将五十九同七年正月十日左大臣天慶八年九月一日
出家五十一　貞信公八昭宣公三男　仲平公八二男なり
貞信公より九年ゐ任左大臣仲平公
左大臣なりしかば三ノ兼平六年に大政大臣と
なり給ふ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

それ遊一秋文もりあり冬
よも久てを
尤れむ〳〵乃中納云　清慎公こいふ〳〵中納云れと
ひ年法おこしもり
花さりれ奇　栄花
よもせおそれおひふ〳〵ときく〳〵公任卿
いそひはっかせる奇かへし後撰のことをきいまうち君こわひにり
やもん百尤のおほいまうち君こわひにり
きてつ〳〵けるとみり奇君こに世それの
そんそ〳〵きりをとみ〳〵女御わもる処に

こよそ〳〵ひこふに尤れはいまうち君こわひの
公をいいてもへ〳〵ふ〳〵そりもせをとふこのおれひ
うりとく
八十三段
○それこれみの蔵くいひ人れむをかれおとこ
筑紫のひそも元をれおはいちさ私恋い称しそも盛
とやをけ月夜女
ちれ書いそこれきう筑紫のこちみ元もさてこちに
真任公貫　系圖みてを
男　それもな
筑紫の奇　一私をさへふ〳〵れ書に　なくとも

ちゃれきの事　ことさら
とそこいたしとゐをとゝ
ゐくいとゐるの人とこちら
こちらくいやまあ宅ち
といふをりと云ゐれ
ゐるふと云流れ月こち
小に来なくとゐ
千宗旦
ゐーこう志賀にまして
法師ゐりそうれい記
法師になんゐりそ

千宗旦志賀にまりてあひしそうこれまで
をしてかくゐるれ乃事をいれりいまい
ゐーこうまなんそうれにそきれりまり
あんそれ引き事れうせ物にならい海
返
いつまいかれ地をゐんこうりもくそ我い出す
とうんゐけることそいとをくちんありけるれ外
物基君やまれ人ゐふいとそうまりふ
草れ茶にゐれる森のゐんうこに溜かつむ
ゐーこ　在お

志賀寺　崇福寺　天智天皇ノ勅願寺ニ号志賀寺
増基法師　有家集号磨言生祖不見
院　宇多院ノ女御ノ法師ニ
女　波止女濃ニモ云坂本也
法師　寺ヒサシヲ云ニ
教ヘ　ヨロヅノ物ヲフトイヒナヲシ
いのち　ヲ云
我いのちもつくし　トフヲ名ヲヨクセ

よりいろ〳〵名をもつくし　ト云ル
草　ヨロヅノ草ノ
やといろんたち　ヲ云ニ
ヲ云ル病ノ我ヲ　ヲ分ルヲヤトウコウシテ
ヲ云ル
分不能
本院ノ小方ヨロヅ云ヲヤハラクヲ
治ヲ云ニ平中ヨソヒシケル
長好ニ縁ヲ云ニ高ワラヒヲ云ヲ
ト云ヲ云カ〳〵イラクテアルヒトヲ云事アリナレ
長好ノ云ク〳〵ノ小方ヨリ〳〵ク云ル時

…ふくをこそきりけ…
行とぢのもくせもそ…我也て…とをかりかき…
くるんいへはけるそれ…てくれもまへくもこのいと…
多くりけまとえきこ…す
中院 左大臣時平公…昭宣公一男 中院 中御門小路
川東一町 依許創 勅 家 築地
ともとこ
北方 右馬権従五位上在原棟梁乃女 母中納言
敦忠母
師大納言 四位少将従三位中納言 長良卿男二条后兄弟

平中 在前
春ものゝ日 とり
おもふ物人事をたのむとふる日 実の字をもて真
実ま事といふにやと
ものゝ日 くもりもなき空也 ものゝ日 ものゝ日
ものゝ日 ものゝ日 ものゝ日
ものゝ日 ものゝ日 ものゝ日
ものゝ日

いとくにも乃ー　いまさら対面なきさまを思ひてとも
ゆくへーわけさらく　此格るとも駆
玉ぞ患苓　右衛門府生本元忠衡る
大同と右兵衛府生本元忠衡る
みーの乃ふに松ことーつらら　欠損いまさ内ま人
ねぬ時時下に松わー　詞君して欠損乃れせう
そこ人ぬそこ
うきぬ可　深秋空を見みそくーくてうれ
まひのあと　ふんこかさくまれわる格ふを天
乃ふけゆくすまわう銀河のなかにみゆ

景気ことそうにてわるとまひのまを見のこを
あまにぬまらなと男に志感情と夜ぬ空ま
かさき乃わる格ふをく裏の言のつりふわひり
産成へー
いとも死ることも　外堂ぬ
ひうやとの可　うらわるこいふるまを
落ふよあくいふ
分注　ぬうふありけるひきのことれるふいとらう
みうれーくて世を人をひる年月
かくてるわうけるをすることるかさいきぬれて

もみぢ　賀歌家具心

野大貳うて乃使ふ　冬傳小野好古天慶
三年正月凶賊使と純友うてまそうーこ
まそう　堀こうをとふことをも
そうてこて　よめ
かそろへをもちて句序こもり川の水汲まれと老て
もをも乃奇　こ句序こもり川の水汲まれと老て
もくじまてまなまことこ寄長秋多ーのんこ
そて山物語ていとうきこみーうもろきこをそう
のもくなるのんよをまれとをもちてこてこあ

かれ文かよもうをふ乃くありてんか重こ後撰
とき統お乃白河と云一和すこ作る気にお
より大貳友平與兵衛督まりまるつるセに
みたへんて打ちてひ給ふれ水をのく
もくよこ作りけるひまれ堀こ重い我るこ
を白川乃とをりこ白序よあれ我墓こといい
ひこついくじまて老をおすこを深ている老
うをいひけくん老うまりるを三川
くひともまるまするいへこ川いくじい文離
とりけるかうい乃それしてまりまる井

乃水ぐむころまで遠国に
日かずふる海を前に
ながり三箇月ことに
すごし又春かへる
悠々とうらら
年毎に我家のうしろ白糸乃ごとく松の名ところへばく
とよそもわり坂機のい大貳もうれしと乱集
機よ同じくれを一とき
はるかなるこんと月毎ふうと
白川肥後守の藩山より

大貳おほきう　大宰帥だざいのそち府務ふむを總べ貳すけ任限六年にんげんむとせ參議任ぜられ宰相なり

小野おのなる古の任のまゝや

おもほえず　なれ猶のうりもとゐ紅葉もみぢ

深草ふかくさをうり出くるといふ秋の扉のるもうもれ

みちをまどはくるまでの立ちもとへて志の森

いふうるくれなるやうもあくうち山く

をみちまもとむといふ

すきものゝ　幸このむ人〻

わすれ草　雖白頭翁（おきなぐさ）

来をば氣さすら　はつ

ひたく〻春ふりし秋をこゝろ

まかきをくをぐ〻しも

と元輔のぐ〻又わさ

うそくのやまいひ

秋乃山へや庵まん

人〻こうそいふのまゝ

ぬく〻しる女京まで

人をわれ名いそくそう

とうえいこれをぱらりける女
人をまねの事　男誰をも
（おほのうへ）こまとはらなる女　舵船舟之狂哥也
舵乃やはまきこぎ出すきこ吹くるこをまねくらん
こまつくるうなゐとわれもさきこの同人ぬし
おやさしきを風情ありけれいくもよろこぶと憂喜の
仰心
舵の事　人をうらむるすきこの風こそもくを
みくま舵のやはらまきこぎ出すきこれ

（八十九段）
そもくといふ物へ
先帝乃在時卯月のついたちの日うくひすをきゝ
をよめるひらかな
高砂のをのへの宮にやどりをれば雪とのみこそ鶯の鳴
となんよみたまひける
先帝　延喜帝之御事也　玄忠延喜十一年三月崩殿
春ごとにうくひすなきをうらふるは
春きるをもしらぬやまこもりかと
白川雪をわけいでむとうくひすぞなく
経嘗乃なるへし　嘗ふこつの木是あり花

…孫を禁中…こと久しくなりぬるをもろもろ
事法が納云記…みてうの月一回なるを
…（歌の心）
おのがみとれゝときく船頭をうて月のいとかげ
ろきを取れあそびありてこと月をゆきゝうこと
ふいなる乃ころろをれなりまとおもひくはつまる
のもとれなるみりのもとおもひくはつまる
てう月をゆきうもいもとおもひくはつまる
禄ゝれはうちきうれありかゝいわりをてぬきそうめ
白雲ゝこれゝ…

船頭　先祖不見甲斐の国の厩子一日預延喜七年正
月十三日任冊後拝大内記従五位下侍従
てう月をの行　心明き時の九拝ゝとそ
大うちき　衣と単とをきるこゝ又不定ゝ方にもう
雲乃とゝあまつ八白雲ゝ
白雲ゝ行　これゝ山方ゝ肩のんもう浅位の人勅禄
…あのりを天津風とゝなとゝなする行ゝ
おのみゝと月のいとかげろきゝ衣をうちやを
ゝろゝろのれさゝをみありをのひりれ
ゝもゝ云忠ゝろゝれゝ…

こきうちきひとかさねさくら女のいとさくらおも
さていろ〳〵うきこゝろ〳〵云恵をもちくてゝ
ひなまついりをまちくてそといふ
しうのもゝりきんこと
みそう　婆心
こきうちき　お梅乃袿心
ふくさうし　と腐女房加へ

云恵をもちくてゝそうれを　聖主院
君いそせうわるのみなゝ　もそうまと
なふんの　みふ
うりまる風流　君いつくしみふく
をうてていはう

平板
△文帝の御ときさにあるみさうしにさ不るな
るへあり此ふみをしみてみそにやりて
とへるとき也御そ也くりてかへしたまふ
ありてなをかへしたまふへしわれもあふよとあれとうみ
この御世なるへきにはのみちにとのこりなくあれとおも
ふれとさのみものへてさりにさる人のをしこかうふれ
このちうなる御ふみをてとりいでて給る物のみしう
文帝　先帝と同しみちとまふへし守り
のみかとあへし
おほそのとき也
明し

あそそれなる人のうたかなるへきにはあらねとよ
このさうなる風景
よりいでたるものの心みしう　にれをる
とのふとりおもしろきものの心をしりたまふ
こり呼してかへり
平板
○三条右大臣のむまそやしたまふ
なるあひたにかくれ給ふ
あるへのこころやなりけるへきすりける
男も宮にれしのひ給ふとなんいひけるとき
乃女

さびしくて　いそがしくて
かくいそさまるりあるしく　煩悩のことふこ
さびしくなるれ今　さびしさうちにまぬかるる也
ちりつるれくのひかりなしこ
○志賀の山ごえ（九十二）
おくうらをきくたりまりいと志賀にまりて志賀
のひてたりまして志賀にまりる女をとこ路
ことわり今大かこもいとれりろ家をとれりう
うえりるとこ志賀にまりてるれのくたこれ
家にまそめりくみてわれりそなりて

かさつけたるとける
ひとのみうたあまりあくる志賀山越て歌こ
とある分うりて（よる分）
若沢　三井寺画こ
故六郎右衛門　村上平八三宗旨数年親寺
天文二年　六月出家ホ三二井寺住長久二年二月十日
薨（九十二）
家をいとれーう　たりろく作るのふとこ
大りるこもいとあり　地京ある西こ
とこ　在前とこ二六近長の此さ久りとこ

なみこハ天暦三年神祇官ニ仕へ家ニ三十二国歌院天文の生
うまれニ春老年ゆへ
おれりそてなくて　久童こもしそて
かりにのこれり　とかさいとおもひてかりまして（院司）
ちなんさはりてたけるハ　家のをとこに死てわ
ちくへさるゆへ
春ニなるまゝ
ちなんさはりてたけるハ　家のをとこに死てわ
ちくへさるゆへ

（今三ニ）
○こやこそとこそいふさるハ人よりくよこをなさ
ゐる
いれゐのをこそさきみの礼てをれこそ舒
くしく
みれゐるりれゐこよハなるかしきれをれこ那
これやこそとこそいふさるハ人よりくよこをなさ
こやこそこそ　誰をしも住せいひそ　美名こ
うれゐの言　うれゐ水をおくくれとみしゐ活こ
屋のしきまゐうれてハ水をおくくれとみしゐ活こ
ももうれゐこれとゐりとゐり

みつの石よの言　水にうつりはさだめなき

○光孝天皇
光孝よれば　よ兼芳
の君とふ人さふらひそれと故京の文まろ
まそて一宮ときこえて父母こゝろ美芳殿ハいと
うつくしかりける人のおはしますとて
あまた皇子達ゝとれるとのおひ立給ふ
こゝろほひ中納言の君に思ひて孫のひろまそ
時くたれまて泊これ宮たちとひおはす
今とけるにやとよりたてまつりける

八とゝくあくたのてまりなれハたゝ故君にそ
かてゝおとくそてなくしやまひになりてこれりける
故兼芳殿のもとへの松よ君のおりくもたてゝ
とゝそのゝなんやまひになりてこれりける
こゝに人ゝのまにゝ
そてな御ゆこ氏君木と
光帝
兼芳殿の御ふ
中納言君　光祖不見
於去君之文　陽成院

近衛の御門光孝天皇三位都子

集作者

一二巻之第七之良歌四冊之恒

右京遠長の女 天慶六年七月廿日薨
一代宮ときこえて とある故久良親王
兼香殿 いとうかきかこにおし 兼香殿は仁寿殿
光常寧殿の間 渡家より西へうつす 兼香殿
渭れ北室小松殿と陽成院の本なるへし 小松殿は大炊
御門の小宮町の西光寺天皇御誕生所なり 利
敦号小松帝陽成院は大炊御門南西洞院西陽成院生れ玉ふ
小松殿と陽成院は中一町なるへし 女御宣旨 久良
親王陽成院よりうつりいとうかきかこにおし
陽成光孝宮院われ皇親遠 — 御の母后中納

親王ましまさなり 久良親王母 右京遠長の女 一代宮と名付奉
或本に兼香殿と深草院とうつりいとうかきかこにおし
と忠仁公氏家 親町の小宮 小松殿にとゝまり
殿よりうつる兼香殿は小松殿の西二町也 久良親王
おさく 隠こゐてこと云ふ
ひとゝなりくれ 御 あくたにそたにわれとて 久良
のみこと并渭れ文とゝめ名にそたにわれとて 久良
渭殿のなにゝかりつゝ山 渭殿のとそにわれとて 久良
の兼香殿ましまへの私 禁中の松なるへし
こめへよの 心 忠玄公詠 — 宮 也

ひさしにそゝのかしつゝまゐり給へるに
みひさしに　せうそこしたるれうと
きこえ給へるの　萩ばかりの
露萩の　たもとのつゆ（ぬれまさる心地）
くさ〴〵そゝくれてとまり給へるさま
かう衣の　角しぐれ人ゝしからぬ
もたゝるさまさへのどやかにをかし
おはしますかた衣　袂かさきみじか
うちへうしにくゝ　うしこふよそ〳〵と云ふ
たゝうちへりに行水時也

みかりする比　栗駒山宇治より
只今よりまゐり給ふべきよし
（十一月）
申つかはす　と云ふる言相のやうやほどのそうこ
てゐるれうとのめもとゞまるやうに
みてきてすへたるれうかの
居うり給ひて山男ひとり
のくゐるさま有かぬ
女ゐてこゝろうり
有ければくうり
おもひよりぬ事と

みーるわらんとこ
男みんなちりぬれと
しとんよの花をあきゝとくにてをく
ばくの男　おとこそ
し事よめたるふ
死すこと共等　そな
のそなる風のとくこと
女なる球よの梅花とこもありちりうしろのひたる
男なるす又よ共男
世中ものし　女りこと
ひるもよなむ　さいの男ともなかろ
男よもちくありつきん　後よよ男にあひ
ばくこと
これもそのよとに
後よよの男共ろ
くありへとよいんもにく言よてきこてきこと
男よとしと共等　我あくなるんとうしとと
ありひこりもとこたる
こりとも高　なみよこりわと云こりとそう共
こりとも又よ

かくてんのへさそいもなくわれわれハ　りとれのこと
くまことをもとかくますへくそてきんわれそて
いとわれとみよとこ
れとこハんのまりにわれハ　ゆんのまりにわれハまり
とくに神こころにとせそこ
れこことんかまりに　ゆんのまりにわれハ　ゆんのまりにわれハ花こと
んかまりそそく　花くをとそます
もとゆんなんもとそ　有明岩ゆすやれと
第一地
山さゆなもとに　京より西南七里ともあることに海

まて志たひゆさし
これハなりこうみ　ゆ書あり入てうくとうハ
なることこうもなこ　ハなりこ大和椎
ひ居く名ゆれし
ゆさそて再ののもめ　そく私よのり大和椎のもめハ
車にのりわれるこ
まくよる人りてきこ
あまりこ山等　河井こよをとこをもる
上ゆれをもとみ
こさゆくいねと　ゆよをこさそる

ゆけとけふこそおとこもめとるきまりとひて迎
事一えおすつゝむ
ほいとちいさく　遠くなる迄てみとそりれ
しひく車にえゆ子
けふの雪に首共にひろひ集にまり水のめと
ゆりのかりそやしこそ
○坂部貞市(安政二)
いと寒うくく雪よみ居るもたとうと
たちれ是本よりとなむいりてなむいすかり
けるそみこ時よめやかうせのひにまりまそ

ていいますかりれそ
こそてよみたまへる
あやそそや今年雪ふりほと年うきことをつくる
となむよろこ給ふ秋梅を折りて又
かれ秋もうすにかれせ公主にてふるも雨や
とよみのりるはすつきて有くいますか
まれいよふ人もとたりれと迎るもせる
りり女とふおつ井ふくてそ給へまにる
らすはくいりことをとまとまたまそ
とれそせやられてくらんやとそ

とも我が妻をたのみ
しまゐに共寝をとこそ
こそてむかへの妻とたのみ
ひてやりけれ
なりとともに今 神よりみひてもたまひかしも
ちかくしなにとともたのみ
とも

よろづも（万代も）
○むかへ（むかへ）さい神われのみもとこ在次君こふるなる
人をうれめや山蔭中納言みひたて又栄

のことなむいひおれ在次君のいうとおり行
よかこのめにくいりをかりけおかりとたいきて
うそよりうにくあるをこれめのせうこれ
さり君ハ志のひてまたいむにるむしあるなる人をみひる
ことなるにこれをとこのたるのひる
ます方ありりる行かもかに
まれなむとおふ気出一さ今ハうれみるとも思よたる
とまでようみたりける今ハ
也
在次君　業平朝臣二四九　滋春　在原氏の男也

在次右のうた
我と手ふれ給へる人と有ふに有
ましきことゝうらめしともうらめ
にあひ色へもうかれと云にあらん
と思ふれ事に　かくあるまもうれしくて
○赤ほのぼの　と記者ほめ
こゝよさり一首さい中将のあれまたにりるに
やわらんこゝみるうりの女御にかよひとる人哉と
けるんことゝよみくく人のあれなんほそき布
くにて八言よそてかきはあるへ一首

おもふよむしりやさいふ赤い海老にる人をけるこゝな
よそてかきけるよこゝろんふこゝ海とよさいる哉と
るけりき
入らめ星さいふむこゝろにて
いつとえる神と色て秋の雲ゝ井俗一さいり海
とよそてかきつまて人のうたにありき
くてかひのふ一つりてすこけるかうにて
ひ一てゝやとく秋をりけり
かりそめ井ゆさいひうとそゝとゝかさりゝそ
とよそてる人をにるゝ在次左ゝのをと事くて

やうとしたやうでけふとそてゐハう
ゐ立ち別れてゐるとおもひ
葉半のおもへ　葉半ゐおもへいさゐへおとく
にとゐーにくいふゐ
小総躍　三河
わこにうゐ
わこはうこ海おゐ名
るゐけれゐ浦つ
物さわとゐ

異物集　三河歌枝
いかいふのゐ　ふことゐこと人ゐる迷悩ゐ流者そ
ゐの名とゐくゐより
ゐ拳ゐ
かゐこそゐ等　果物ゐこと人ゐる辞世ゐ哀
備中歌の歌ゐ文ゐなるしひゐ辞世ゐぬ
にゐくゐの元ゐ人ゐゐ浦列ゐ逸ゐけゐゐかゐ
ひのこゐゐひゐりゐ伯ゐ歌人ゐゐく
ゐありけるゐ返ゐかゐにゐやゐひゐて
いルくゐとるゐに行へよゐて京にりて泊ゐ

余こたびよかるべきおのが第一の事
とふ今よりはたらくよろこび
河底　よろこびの底
うかれめ　柏女
きみ　白柏女の名ごりの
沼底きみありやいなや
泡りてはかなき　柏女
よきアイ　かな
竜上人　竜上に祖仏のご信仰人と
みこたり　親まこと宮ごろ

ゑ
演よき
ゑ
かぶき
いのちたよりの
女ゑ
ゑ
ゑ

ゑ
よきかな
ゑ
ゑ
ゑ

（旧三十番歌合 六百十七番 左勝）

かりてゐることけいせの
うたに水のそこにくもひゝて
やうなりてや一のみこ
かつらもなくゆくえ川
又哥
いにしへのたまかつらかけ
会話の命婦
はゞかりもなくともにゐてあふと八人にみえ
いとあれへなり
かりまのなくてやえて人名にかりねんころとも

いさゝかりしたりけれやに
あふとおもふ
又ひと
ふるまひてわがもと人にたちさろ秋どうさ月水に乱
みいりひとりもれたるこにてありて
なつ久にさし中のたにの夢うつゝ
ひとり
うかりける我ものことと大ろ八ツ時分より降
みひとり出家になりて
ちゝはゝに離らすなよといふ打きみさ

こにうるとうへるれ
る人なりけるにとらへて
人のいひるままなり
姓はむら　兎原郡（上野）の名
らね　第八段
ふるえれ　のそまほるひまる
たやかりてかくみそくく　女郎より初
ひとりくに　れそひとりまわへる
宮にもさあふに　やおとまる
いりうて　そのこハ尊とかけま

ふいうたれ　二人の男にいれてところふ
そまくばさ　そくる花よりひくく男よ
いとりこて　たそれ花よろふと
そのうく　そ時
ふそこひぬ尊　男多とるけ志男いろうとハ
名ありそくも
汗よのそこて
そうやまと　そうて
おとびとす人さ
放ふさ義　宇治湯治

いへなりて八　二人男子
儀式執行　伊勢敦慶親王薨じ給ひて
うむかれる和歌文衣筥を
方とれる事あり
かなよとその言　みけ
とかきつくる人よ水の泡なしかけえり
ねとこのようなる水の泡なる絵かきて
よとうたひかきつくるかまえりみるとかくり詣
るまかりいでぬるをよりとゞめさせ
やよみこ　物ごと寛平中宮温子仮服

のゆゑよみことありて後代祐る内親王宣下みこ
なれと言会一宮とゝもに
かへりなれ言　やよひの
又宮　同じやうに
いかにこれ言　男よんとなりて
宮とりせて此事を彼若海のんとよめる
共活の命婦　筑前守為原言後
ひのよりもの言　やよひの
もとなりてふとハなくなりぬるを
そ悦のあるべき時よりて　ひはより

たとひ
いと平凡別而　古今作者典侍冷泉
大納言藤善縄女赤染衛門
時のまうと人経ぬ不老門
寛平遠祖云百錬
自首知朱雀
勿事なりてと海とよる
男ぬいけるはのんよりてこ
五人

ものまうで　ものまうでにひとりにひとりなよ
仆そこらにかくれ　物といんため
人　祇女房撰集よこ人ならすにかくりた
ぬしなけてお
ひとりひとりの　人とある人のみ
ねーえの
ぬーあ　これもあ
うのとなりの
心ぬも

みびとりお留　うゐ
君とのこよひ　ん
いで音川人れ作也

行かよふ　あ
なと作　いつそ
かぎりて　協の
日本記よ　遣
おもひ協也　女協也
さえ明　志
浜千鳥也

いとむくつけく　奏
うとましく　いや也
○汚の國なれば　家
あれ志りて辛比ありけ
ありて辛比ありけ
くあるを奈とこれ
ありすえけ
ひとりぬる夜八人よや
ひとりかも寝む也
なよとうたひたうてい

男はくるしくてのこ
はいかもしくえいくもう
いんとのこいひとり
ことかくてとおもふる
てこゝにはくへともよ
ととゝもへとよまき
たゝ神とゆう人なとる
にいひきやう京にたり
とゝなくてきたれはは
のくいとおほとゝやう

いとおほくゐんを
みやこの国とゝやう
そてよこけれ

祇てていにせきこ
こな人ひとりこちらく
ある人ゝにとこと
ひてありく祇よさ
つき事なともくて
かゝるらとなりに
る時とわ京祇をい

こぶしまでもうつくしげにて、
やとなつかしきこゑのいひかけたるやうに
思ひまどふこともあり。今こゝに我(わが)
ほまれきずさもなく、
なもいとおそろしきものをたてゝなるも
にともの人のわれをしとそれ車うちなげうち
とふにたりとふ花よりにるひさるたとえ
のたひのやうなるをうるひ車はまへよりきたり
これのかとそれ人とふくともわるを
いうさきにわれとわかたをこにくたれとみて

よくこゑ向ひさにそれおしもりさるたおこよ
せよおれかんといひもれるさり花はようなき
ひとをとそ思ひれとたうのふ事なれそ
よひてゝ今すくるまれもこのかとようくにるひよもよえ
人をといひくひ花をこのかとようくにそれ
りうるいとわれよかおおきそひて世にる
人いなんといひてなきれはとれ人花おほき
世と表るとの人思けるくてひりは男におるを
くをよともいとたはけるくりおるひよともよ
といひのれはすおれのになたものたりくる

りんとあるべくもえいひにて
ていそともよとうせんとおもふるに下をたゞのえ
さ海もあきたるよりいはの男海のれいわったおこり
あやおさにんおさそてみるにくほとこおもそ春
ありとおにおひのせくまさ海男いとうろ
るくみたるとおなひてくるにいとそそーたるくてほ
とうりとそそくーりてあにけまりおりおいまを
名と人の家よにそをくく海のおりへにかてまり
とりけることお車よりそなる球のおとこたに種てみて
といひ名ハとこもの人てをあぐりてもとめさは

きたり人うこなる家よなん伯まるといへこことおを
こにかくおほせとおりてそそありなたのとうひを
ふるふさにもあるとものとこそいたる海そ世人と名れ
おさるきもおりさいふさきにまそやをこひてを
とのくそれな
君なくてありうきとおおにといとくるにそ海そすたき
とかさそのへーてこれよおにまくなるあけてこるかう
あやしっさひくりてきまくなるまに名れとこれそ
ま事もおなにそうとそなさるさそくへしい
り志ありんそそ海まにさたるさそん

・おしよう人とそてそ列う人なに雑波よ海そすこうき
集れん八雑なーて海女八なくお男八なろうんに臥て
多や八表ともおも年すこ久ーくわねーます
のけにいんるとう男ハ前の八行のすこうろんとびたる
すーるこ列の八行のすこうろんとびたる
んのうりれて也ーなく也ーいくろうり
うんーうもそたんをうとと花者ねのけるこ
車にきたりける衣ねさて 外車よると衣ねさて
ましーるも
すーねしとそこそ 外車よると衣ねさて
一行あくすり拾炭ねーさと自かのうり行か
りうくすると集に行集に送ねーさと今ねーさと行
いうあうんうもそたんをうとと海と海の人一行
あけそ人をるあんー 行集に送ねーさと今ねーさと行
○昔やまとと四ろうきにそむ男女きうり
ねやそかるこういときよるこ幸比ひうりて住にこ
のやいとろくなりにれ八ひわろひてかきるな
くひのるめとものうけくりこれ今の次八と
こるありなんまるとたねるとにけそ外
しうさうり男共そくもいときようう

せうそこりかくにさうらひーまゐになるひくきたれ
ハこれおいとわろけれてみくかくかつにありけと
さうに神さけよとみしとなとおれいとおれ
とおひりんらにもかさりるく神さくくりく
思よなるにな人ものまるとまりな人とよ
よと花夜をひ花ハわかくありきするとお
まてこさわさまるにやあむしまさせさうう
むうもりみむとんれ泊よおひりさてい
てくとんてせ人さいれ中にう花く男やく
ものとみれそーに出みくく月のいというをを

志ろきにーらかいまはやとなとしてとり来ふ
くまて神そいとうちなけきてなるる
ひれと人まれるるとう人のまんな男る
にひる
風声おさ花そるるくる前山来ほにや君ら社ふ
と夜花ハわっうへとおよなりりと思にいとれ
ーうあひい海の免人の家ら高山こてゆくたふ
る人ものるかくてなとう人とり花ハやうち
まてうしてるまりに水とれてもよになん
ふ人のまりるあやしいたるにっあんとてな

と也
なつかしてきたれば　ほうくとなくなる　位則て
ゆうまにくれて　まつけまくと源氏物語
みとの心とて幸行とまるひとる
なおるとこり
んでくとよとこるふるたる人ありける　童題
ほふ人のまなりけるた　古今集に
風みけれの　新撰髄脳よ要くて斉衡年
にとへーとるこ密勅よりて立田ひといんて

奥沼白流といひ沖川白流といんよ風穴
とをくやも宝家さ　動こ云奥津白波のる
遊人のるとて関伯ーと来て奥て作ば参
宝ふやと来よ大和よ　ふるとと
やと来て奥とハ宝動よほする顕昭の今来
旧説ーと荘るよ緑林白流のまととり為人
ばるとと云伴密ふとすて奥津白流といん
とて風吹ハと云ーと来て奥とーと云ばよるしき秋ぬ
ーと来て奥とーと云ばよるしき秋ぬ
れのうとりくる会流のやまとにそあ
ふ　ーと来ーと会ーと　ふへとて仮ふとも

と八風のけしきもとりどりに
こゝろやり餘ふかくて
なにはつ今ひの御代よとまつ
とまれかうとまれかくとて
せよとこそ
ふるさとは 戀しかるらん
花ゆゑに 山こそ春の
けしきなりけれ
こゝむひのも
かくいふわれも ありそみ浦の

海の男や
船人や
みな遠つ

かいまのめ 垣間見や
おもてふせ
賀茂つゝみ
けしき近のさゝ

きにけるものを、
山里は おもしろき
とあり 萬歳の
○首書

一代竟以於京の文なれたる人と聞さまへ
京よりおくりまいらせ候よし其氏の事とゝすこも
うらめ（ナトヨム）一誰共なく来女八拾四の日共ゆゑに作る人
人のやど（文）見よきと称する女官式八拾の来女
きと云の来女ハ何八拾義門の西門脇日
れなと
そてにきものよなん
（来女の下とそ秀る法師にみ）
ほすゆへ（八）
おはみゆき
柳本人凡 三三位 先祖不知 敦之（近衛家雑掌村上五郎右衛門ニ）
亮なる也
（名なし）
凡なる也

三十一番院
三十二丈
統久武盤嗣云
日さもこれ（ナヽ）
祈廣（ナヽ）れくこ慶（ナヽ）
よし拾遺家傳抄云 心明こゝきとこ書妹兄ねた
なり行するとみくとあり
する沢の池と作しなれ御司 わさもるの志門ハ
水とひよりそれ司也
もゝさ再ふくく 墓をれつさ毛のふと也
（百六）
○おなりみとたつ
れらへまる日

立田の紅葉ちるかとみるまでに
御川
立田山とちみそれてなるそりわこら八物中やもしるし
とそあそり
龍田川紅葉みだれなる有待枝（秋ヲヒトヨム）と云ふに立れと
他名なし仍て先拾二首其ニ入凡後の八
此川とありて此所のよし御川とあれ八先拾遺雑
て入凡の詞とそ今にそ浴八錦の此詞
おにありて此所よし云八ふる人ふれ川の此歌
となん八ふとそありこもろれもよの言葉よりて

定家卿の小書に此詞不注八凡詞他本又同とありゆへ
なりとそ
立田川紅葉みだれて流るめり渡ら八錦なかりけり
同一人なるへき事也 前也紅葉八同し帝
の御代のふるひと云ふり（ヤホノ二ヒトヨム）此八同一帝（ヤホノ二ヒトヨム）
○紅葉みとかりけとかくこの見ゆゑ
立の國いそのこほりなれそにふるてふ事よなくて
こりけれそにふるてふ事よなくて
ハいそてとる人つまをもたまつさにかけ
てそなれりつつ雨つり給ふ大納言行

かくこうぶれ　よきさま書れしや
御身書　天子此書をもまた多くもたまはりぬ風華
れしものたのむをとゝ取よさこゝろ志川ゝ為此書とそ
ひ河なこれすゝむなくこゝろかへし書八仁海乃御守護
脇の坂よりく薬をそゝたり山河武田大臣よりとゝひてまふ
御製あと今二首仁海記よみしなり
かれよみありてあり
（後海云記ニ依ニ大宝元年二月任大納言大将従二位藤原朝臣不比等ト云ヘリ）
又ほうこと　大納言也
おゝてとゝ　大納言とゝ　文武天皇名工
（ウトシテ退ノ）　たいく退ノ　ゆく　退ノ　也　退ノ　也　退ノ　也

草に
○なら長柄の川位よおくまでけるときさみとハ指
よおりまてくれてまつりのひる
みなへなのふ笑つるふうん白露たちとたちまつる
みとれ迄
ゐるへのよかるふうん白むへいろとふりたてとり
なりぬ帝　平城天皇之大同天子桓武第一皇子母同治十四年ニ崩ス
為ニ平瘡賜大改元良継女治世大同弘仁帝
ハつてうへ旧都ニ遷すもの人数へるうん帝と云ニ
ハつてうへ帝　桓武第二皇子母同治十四年ニ崩ス
信よおりまして　春文よこゑよて信よおりまつ迄

皆人の花の宴　蘭ハ名ノミニテ
なりのみとも
ゐる人の花の宴　てなるへハいつも春ハ
なり山へハよも大同天子
なよれなる景気を以花ハ花とハ指
共の月冬儀石楽考うす光仁伝り迄孔事ニ
大将軍と一軍将平城帝ハ病家薬ニ仲成妹ニ
みこ出家志ゐれ法の者ニ真如親王
○原注　原ハ四なり今ハ
を表ニりさてゐる男よかいまそえけるにハた

○首大納言のむすめいとうつくしかりけるを

大納言

さてそのよるにいたりてたそがれと辛比寿のこえやひよのれいとかくれたるにこれや内のことよる月といとゝ窓をうつくわくくていとくるしうそてをひとよゐも移らしとおもひてかくよこたはれり

わっちなくさめうの川ばたにてなん又いさてむりてきにけりてしなものりなむとそてまといひけるうちはこれうよりにはんありける

とのたまひぬ
雲客ども、雲客と公卿とのそれぞれ
云ひよそふる人々みな
とまりぬ 船々に深みと云ふや
おのおの 四位在中将ぞとけり
やがて
わきに寄りとどろくもの
やくありけれど
我のせとどろく風ふきぬと
となん人々いひけるかくてもすぎぬ
ようさぶらふ人ありよとこゑごとにいらふる
とするに人々くてていとをかしうて
一てゐまゐとの給ふ
ふとにてそいふる
大将さにのりたまひぬ
となん人々いひけり
ゐなとも
さなん人々いひけり
同じ国司 同者共
在中将 在京蔵人弁なり

秋萩との言　秋風に若
ひとの心ぞ
平にの給ひよこせく
在原業平朝臣とあや
秋の野もよの言　秋
かりしも世籠者伊勢
きわなんにとこそ
てしとこそ
あるべ　衣あるぬ
秋のるすしてあ　衣
ふりて　うるさ
大ぬさにの言　花
るれくるもなきこ
なるほとよの言
こそわさにと給へ
ひ川なあるさにく
しくとこそ
さとなりぬるの
ぬへし
原中将二条
在中将二条

以宣言布告セサル事件ニ関シ
ということを
ひ一式　海事ニ関スル件ニ
関スル件ノ
ヨーロッパ条約ヲ以テ
東支ノ為　陸軍ニ
条ノ二条ニ
ヨリ未中交
云良ヤラヌ
政院昂位日為中

の洞院の条ノ二条と云ルヨリ式ノ二条と云ヲ
ニヤラヌニテ　私ヲ以テ供ヒ
ナラヌヨリ云ヒ
ヨリヨリ云ヒ
沖ひとつ
のヨリ必禄ヲ
在中ヨリ
条ヤヒ云　禄ヲリテ
大条ノ
行啓ヨ条卒供

○さいかち（いね）

まいりおくれやよのやまと（ゐ）まいりおくれやよのやまと（ゐ）

うへ〳〵（ゐ）

とかいつまくまりてなるとてあへし

伊勢物語（ゐ）

のまゝにそ（ゐ）

うとやまにかりてなるとてあへし

うへ〳〵（ゐ）

かいつまく

○在中将（ありなかのしやうこと）

にかくいふなりけれ

あやなくあかぬ君かなかれ

とてきえなんやはしけ

伊勢物語（ゐ）

のこの段とあやまりて

○水尾（すいび）

とさいかちまいりおくれやよのやまと（ゐ）

とさいかちまいりおくれやよのやまと（ゐ）

いせおはなれ（ゐ）

かいつまく

○在中将（ありなかのしやうこと）

にかくいふなりけれ

あやなくあかぬ君かなかれ

とてきえなんやはしけ

伊勢物語（ゐ）

のこの段とあやまりて

○水尾（すいび）

名を申おやまひよりくーてうろひろまと
のよおりともあり二れいはと思のてきるなれいえいは
とあるおおくよまんとあるひるる日また
ありりまるにとおれ日ろんありるや向ひもいまく
木のやてそれ有むなり成り中ねのもとよも
成れくとよろ解修まぶかほそてうしてえる
とそをこをこうよろくまりたりとそいとたく
なるざさて也ーなるもせんとするりとにーふ
りときてとっとうーうりるとあるんとまる
とくとくとなりてようとなり成

ばの成れみりとハ成てきしかを吹ろと日とハ兵ハまるを
とろそそな人角くまたそたり

水尾の帝　名平成語和天皇之文徳第二皇子母友泉明子
号滝雲也仁也女

元大年　友泉良近(二十七)之女也

九大年　六中納云右衛門督良相卿之女也

朱雀帝　諱ハ寛平法皇第三皇子　母ハ宇多帝ノ女御従四位下藤原温子朝臣也

帝位ニ十年ニして　譲位ありて　久慶三年九月家慈父大師
受戒潅頂法号景真井波岡水尾ニ於て崩ル三十一才

水尾帝　諱ハ貞平親王第一皇子　母ハ紀名虎女静子也

心明や

いまく…ゆく　春深人とてもなたこしやまひてよりくめぶる村トつり

ゆるよりわけ行　頃となりぬ人限りとそ

もり咲るとハ思ひきや

延享ニ乙丑　三代實録ニ文慶元年六月廿八日従四位上

右近衛権中将兼春宮亮行中務卿在原朝臣業平薨卒年

百十六ニ

○在中将ハ名よりそくせのふかきもたちまさりてやさしかりし人

みくさ山ハなのみにあらねとも

てあり白にそやまぢ

みそもあるすみもまれの人のこゝろ

とあれハ也

人とゝもなたれてこゝろ通ハぬ

さそいなひ落あれらハ

山路をも泊よみ

侘ぬのこゝろ

これらハ

○草庵　花とこやまぢさわとうりさて

ハゝ　とこのさわとうりさて

そりなこゝろ

（左ハ四ヨリ名之処父若ヨリ
なたこしやまひてよりくめぶる
村トつり）

いそぎにみてるねことやりこうとけるときにやかく
ぞやりける

いなやこうむとたる声にかりねをそふく
男女 たれをかこさぬの雁鴨とうへくもし
るこのまにいせんもるくまねともへとそんく
いなやさしぬ等 とて雁鴨とうちるくかこう
しゅし

○夏八俵 よろくさみそうこけるは時うれかねとふへいみしき
はまてありけりいとよこれこーなんへりける悪
ひてときくあひるやねの雁ーけるよ

ひかるうまをあんとうこうこうる夜をりやくう
ぞさうして行りー
やみやんと思ねよとととせそめて夜
くにしみ川とー
云やうる
へうろうし高
とぞやりぞりけるに花とろうく
夏よ高やと寝てすきに落
ろう松子よりくうちやを
ろう松の林すきに

深草の帝　五十六代仁明天皇の御諱正良御母皇太后橘嘉智子贈太政大臣清友女
治世十七年承和十三年三月廿一日崩ず千洛陽
殿宇干一年九月廿日山城國深草山浪華敢号深草
帝

良峯の朝臣　大納言右大将良峯安世一男宗貞延暦廿
年賜良峯朝臣姓兼和十一年正月叙人（ホの）十二
従四位下十一日任右兵衛佐十二年備前
介同日右の将を辞す十三年正月叙人（ホの）十二
七日従五位上兼又
いみしき時のそうりょ　誰なれ
けさうして　無相や
ぬかごと　文一剋左近衛夜行官人称変時統る
菊亜一剋右近衛中（なに）至卯一刻内豎文一剋奏

うしこ川と　右近活の時や
人名　うしとこ川れまーとや
巻よろやとれ　跡活(王)名(とき)と云ふ
や拾遺集連歌　仁明(きみ)帝や
崩御　倭歌や
仁明帝や　和祥三年三月九日崩(かむさり)や
ひさうみれ　集
ひしいの年　精進(きよまはり)斎(ものいみ)を八日の六和の経
亀卉　禁之安堂や

よろしくとよ　正(まさ)大方(おほかた)に
涙もなく　深切(しんせつ)なるや
ともかくもなれ　まさをれ(ま)なる通せれ(ま)すまし
ひとまきていとげ　しとや
なきいろれ　哭(なき)悲(かなし)多(おほ)なる
義(ぎ)と云　ものなるや
なしにこもり　導師(みちびきし)より生(いき)死(しに)をきるや
とうほうそく　装束(しやうぞく)袍(ほう)袴(こ)等(とう)右(みぎ)
すべて　調(ととの)淨(きよ)の布施(ふせ)
とかよ　ひけれ(ま)ども　古(いにしへ)来(より)

丹精と等き程も
無き涙にてなんありける　遍世の後の孔子教勤省
漏刻定数こえてあかつきを
かねと打ちきくすゝめ　遍照の后市まさしくすゝめ
ぬれて　一めぐりせし春と
一八の業　久章よりはわれ
賢人なお等　左今中十六一一ありんふくの行つ
さまるや花の衣ともいいらん　比よりんあり
五条后宮　仁明后久徳母后宛々副公卿頭と

和祥三年六月皇太后宮　貞観六年十六皇太后
十三年九月共大后崩　御年三家五条南東洞院東号東
又条故号五条后宮
ゆくりもなく　不意や
かりみのとも　后宮の
ほのぐもありし　宗貞の妻
ぬれてまつ　近き所と
いきらひ　りし
わらんへ　宗貞の子
ひとりこゝに　野へてゝ

かさゝぎなきけ等　古今離別ア　よこ人今ゝ共
ゝに人よんよとそ
よそゝもそへいっ
かもわさに
久くゝにゝ
あ為ゝなよと云んゝや
ま
くんせり　啓せ
ゝなく

（朱にて）小野小町とよみ人しらずとて
なりとこゝなひるゝとてまくにかやう
なりときはしかて
ひとよ小町あや
よそてんもけれ
しのように
こゝろをたゝとくひなり
ゝ
なるへりいよ
あやあんとそこ

弘法大師之作天皇勅願
と爲し一宇を造立して觀音之靈
像十七幸七月二日東大寺に佛殿と造る
納め申納云坂上田村丸私宅を寄附
近鎮也坂田村丸建立と云々大同二年勅諚
尾法華小觀音寺大門ニ額法華寺之見紙
起請有幸庚申七幸九
よこなひるとうくに 遍照
とうくうくう
とこうしたゝみ 續紀曰延暦十二年

梵語の咒や
羅西やうく 作者ハ兼倉史陽成の事と云々
文和四年 いうふとて 何といふ
いふ心なり 成るにて 初る人ゝのやうに又飛
なく云ふ心なり 成るや
若其上にの事 ん鳴 法撰よりの事と書
上と云ふにまて 日ゝ月ゝ 来明て
ゆんとそのうまり 法師作り

と人ゝつけ侍れバおのゝゝこゝろ〳〵とそ云伝ふ
さあり若ゝ上にとあれバ右上寺ある乃ゝ紀
師弘真性法師ハ遍昭の猴の如く法侶を遍歴
世とそしるゝ人ゝ明や
ゆゑなりと　ゆゑ云ゝ仏神と小河
ゆゑにかゝわる物ゝと治定をくりとやけ他者
少知て宗貞と治定をくりとやけ他者
されるこゝ色しるしありる紀と人ゝかゝる
あそひもろ〳〵我ハあるとゝもとやうに
ぬなりと云ゝハ花者法楽り真言
法如ゝ遍昭のるゝ仏神をとて云ゝの事や

一字ともさすれと　寺門と称ゝや
僧正ゝて　僧正ゝハ准ゝ議僧寛ゝ平
校僧正ゝ宇多ゝ仁和ゝ年僧正ゝ二年肇ゝ車賜ゝ封
戸十二月八日辛七十二月十九日辛花山と云ゝ寺　ゝ
寿九近将監　手ゝ
八
ゆもやゝゝゝ　桓ゝ武皇ゝ子
なりるハ人ゝにけるゝゝ

過去荘厳劫南無千仏現在賢劫南無千仏
未来宿星劫南無千仏〉

○このこと、志なり。

なりぬりけれ、おもにもまず京にもかよひ
てる人へありき、まことの大とくはそくみ
る人、むしを火けちてうしろにかたらひてたりおもう
きるとみてくにかけてたとことをもなくいう
うしろくことをもとなりにのれ山

うちそうしてゐてこれかなひもえせさり今
いとひさしうありてこれさかれ、おもう
とまなとまうしてこれさかれ、おもう
まける山大とくはそくみよのほりた
なとしてうちやまけるこれかなつまけるこれかなさてありうり
今くもやとまうしてこれかなひもえせさり今
とかきたまうしてこれかなひもえせさり今
えたうして京へいわのうとこれ山まてお花と
やとひとうしてこれかなひもえせさり今

大和の狭井(サヰ)より出(イデ)まして、別(ワカ)れ
位(クラヰ)八年(ヤトセ)勅使(ミコトモチ)五位(ゴヰ)の川合(カハヒ)大祓(オホハラヒ)石上(イソノカミ)大和(オホワ)路(ヂ)五
ゝ、二月(キサラギ)七日(ナヌカ)二度(フタタビ)豊(トヨ)の明(アカリ)九二社(ココノフタヤシロ)へ
参(マヰ)りぬ
こゝろのてこ　こゝろのてこ
のまゝにうつりかはりぬ
とたせてよしや　筆(ヒツ)とらせてよしや
筆(ヒツ)とらせてよしや
汝(なれ)とゝ云(いふ)とも
水(みづ)ぐもあるらん　参(マヰ)るにやとりておた

井(ヰ)のある水(みづ)ぐもあるらん　参(マヰ)りてこゝ
筆(ヒツ)とらせてよしや　こゝろのてこ
これるまゝにうつりかはりぬ　汝(なれ)とゝ云(いふ)とも
水(みづ)ぐもあるらん　参(マヰ)るにやとりておた
のまゝにうつりかはりぬ
とたせてよしや　筆(ヒツ)とらせてよしや
○百廿一　これひろ社(やしろ)等(ら)の中(うち)の別(わか)社(やしろ)をいふ
社(やしろ)地(ぢ)は皆(みな)別(わか)社(やしろ)にて
ありのまゝにこたへ給(たま)ふ
きこ月(ツキ)より内(うち)にて

十一月廿日侍従兼旧美乃介兼平定年冬議
六年刑部卿七年九月廿五日薨
中納言従二位藤原朝臣良継
故贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣公之第二子也
母贈従一位藤原朝臣美都子
良継幼而聡敏博渉経史
弘仁十四年叙従五位下
天長元年為侍従
二年為左兵衛佐
三年為左近衛少将
四年為左近衛中将
五年為蔵人頭
六年為参議
七年為左大弁
八年為権中納言
九年為従三位
十年為中納言
承和元年為正三位
二年為大納言
三年為右近衛大将
四年為民部卿
五年為中務卿
六年為上野太守
七年為左近衛大将
八年為中務卿
九年為兵部卿
十年為中納言
十一年為従二位
十二年為権大納言
十三年為正二位
十四年為右近衛大将
嘉祥元年為民部卿
三年為中務卿
仁寿元年為兵部卿
二年為中納言
三年為従二位
斉衡元年為権大納言
二年為正二位
三年為右近衛大将
天安元年為民部卿
二年為中務卿
三年為兵部卿
貞観元年為中納言
二年為従二位
三年為権大納言
四年為正二位
五年為右近衛大将
六年為民部卿
七年為中務卿
八年為兵部卿
九年為中納言
十年為従二位
十一年為権大納言
十二年為正二位
十三年為右近衛大将
十四年為民部卿
十五年為中務卿
十六年為兵部卿
十七年為中納言
十八年為従二位
十九年為権大納言
二十年為正二位
二十一年為右近衛大将
元慶元年為民部卿
二年為中務卿
三年為兵部卿
四年為中納言
五年為従二位
六年為権大納言
七年為正二位
八年為右近衛大将

とゐありける

すこしのしめりさす　信州善
（寛政十三年任右近将監別当也）
ゆふべかな　五月雨の雨のふりつゝ
ふりやうる　左馬頭別当也

うす雲さわきすゝしの上り　秀政卿と飛鳥井
二ノ一きこゆる

ゆふ雨り　軒ふりかゝる　磐手川ありとて
紫衣来宮家と云ゝ

よとさおひてほの　少将
梅花有ゝて見ゆる　信州善

雪ふるきと人〳〵
おく〳〵とふく　笹ふる
雪ともおも　かゝれとも
うゝせとも
おしきる雨　こゝろ
えんりおりてゆ
む月十日のゆふ
ゑと有　一き
りハかり
やうく

ふく〳〵とふく　かゝ